

暗躍する者

国連宇宙軍

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

後に一年戦争と呼ばれる戦いの中で、輝く者たちの影で苦勞しながらも戦っていた者たちがいる。この物語は、そんな者たちが活躍した話である。

目次

第一話	1
第二話	6
第三話	11
第四話・前編	16
第四話・後編	20
第五話	25
第六話	29
第七話	34
第八話	38
第九話	42
第十話	47
設定集	51
第十一話	55
第十二話	59
第十三話	64
第十四話	68
第十五話	72
第十六話	77
第十七話	81
第十八話	85
第十九話	89
第二十話	92
第二十一話	96
第二十二話	100

第一話

宇宙世紀0079

宇宙に浮かぶスペースコロニーのサイ

ド3がジオン公国を名乗り地球連邦に宣戦を布告。同じくスペースコロニーの「アイランド・イフィツシュ」を地球の連邦本部ジャブローに落とそうとした。しかし、コロニーは三つに分解しオーストラリアのシドニー、北アメリカ大陸、太平洋に落下し総人口の半分を死に至らしめた。そして、八ヶ月の膠着状態を経て連邦軍は、V 作戦を発動。モビルスーツの開発に着手した。そして、最新兵器ガンダムが開発され戦局は逆転していく……

この物語は、表に立ち活躍した者たちの裏で、密かに活躍した者達の話である。

連邦軍・トリントン基地第二格納庫

トリントン基地第二格納庫には、人型兵器、通称モビルスーツのジム・トレーナーが三体整備されていた。

「へえ隊長、これがモビルスーツってやつですか？」

「そうだろうな。これから俺たちはこういう物に乗って戦うことになるんだ」

「それにしても、第二十六航空師団の者が全員モビルスーツ適合試験に合格するなんて思っても見なかったですね」

「ここに居る者たちは、全員が同じ航空機隊からの選抜だった。

「まさかだな。まあ、仲間を信頼できるという点では大きなプラスになるだろう」

「確かに他の部隊では、知らない者同士が組まされていましたからね。それに比べたらうちの部隊はすごく恵まれていると思いませんか？」

「そうだな。他の部隊は信頼関係を作るまでに時間が掛かる。しかし我々は元々信頼関係があるから、兵器の訓練に集中できるというわけ

か」

「そうです」

「よし、それじゃ早速訓練に取り掛かろう。全員マニュアルは読んでいるよな」

「当たり前じゃないですか」

四人は各自に配備されたモビルスーツを起動する。

「本当にスゲーな。これ」

「これならザクなんていちころだぜ」

「よしまずは歩行からだ。全員、両方のレバーを同時に押すんだ」

「了解」

四体は静かに歩き始めた。そしてだんだんと速度をあげていく。

「おつ、みんなさすがだな。よし次は走るぞ」

「了解」

モビルスーツがさらに速度をあげ、基地のなかを駆けてゆく。

「みんなすごいな。モビルスーツ適正Aの実力は伊達じゃないか。よし、このまま演習場に移動するぞ」

「はい！」

同基地・演習場

「これより射撃訓練を始める。全機散開し目標ターゲットを破壊しろ。マニュアルどおりに動けばやれるはずだ。全機射撃開始」

「了解！」

モビルスーツが持っている武器から、色鮮やかなペイント弾が発射され次々に移動するターゲットに当たり、色がついていく。

「全機、目標破壊完了」

「了解した。これにて訓練を終了する」

モビルスーツが基地に帰還していく。その姿は夕日に照らされ大

きな影を作る。

同基地・指令部

「これより、貴官らに辞令を命ずる」

「はっ！」

「貴官らには、第十五機械化遊撃小隊として各地で陽動や攪乱任務に当たって欲しい。そして、グラデイー・ラクス大尉は少佐に昇進。モビルスーツ部隊の指揮を命ずる。貴官らの初任務は半月後の中央アジアだ。それまでに訓練を積んでおけ。以上だ」

「はっ！ 承知いたしました」

ラクス少佐は指令室を去っていった。

「隊長、どうでしたか？」

「俺たちの初任務は中央アジアらしい。俺は少佐に昇格したよ」

「よかったじゃないすか。少佐どの」

「俺に、佐官は似合わないと思うんだがな」

「そんなことないすよ。あなたは航空機時代からのエースなんですから」

「俺はそんなに偉くないよ。出撃は半月後だ。それまでに各自訓練を積んでおけ。三日後には自分達のモビルスーツが到着する」

「やっと自分達用のモビルスーツが配備されるんですね」

「ただし配備されるのは三機だけだ。よってケンはずばらく戦闘はあらずけだ。以上各自解散」

四人は自室に戻っていった。

その頃、指令室では、

「司令、グラディ・ラグスってあの航空機のエースですよね」

「そうだ。あいつだけでザクを六機、ドップを二十機落としている。れっきとしたエースだよ」

「だからこそ、レビル將軍は彼らにモバイルスーツを回したのだろう」

その後も、ラグス少佐についての話が続けていた。

三日後

彼らにモバイルスーツが配備された。配備されたのは陸戦型ガンダム 1機 陸戦型ジム 2機だった。

「これが、俺たちのモバイルスーツ……」

「よしこれから十二日間はこれで訓練する。全員訓練を始めるぞ」
「はっ」

三機のモバイルスーツが起動し演習場に向かっていく。

数時間後

「隊長このモバイルスーツ、ジムとは大違いですよ。名前はジムが入ってますけど全くの別物です」

「そうだな。だが、このモバイルスーツは替えのパーツが少ない。慎重に扱えよ」

「わかってますよ」

訓練で意外な才能を発揮したのはさつきからラグスと話しているシュールスだった。彼は、モバイルスーツ戦闘の中でも射撃が得意だった。弾を十発撃てばすべて目標に命中する。だからと言って格闘も出来ないわけではない。両方共に才能があるのだ。ただし、あせるところもあり、いろいろ事件を起こすことになる。

一方のサクリスは射撃か格闘と言われると格闘に秀でている。チームサーベルを展開し相手に肉薄、すれ違いざまに切り上げるという一連の流れが得意であった。このチームは三人が三人共、他のチームメンバーの無いところを補うことができるのだ。

しかしだからと言って、訓練の成果を実戦で発揮できるかはまた別の話である。

第二話

半月後・中央アジア

「まもなく作戦空域に到達する。全機降下せよ」

ミデアが低空飛行を敢行し、モビルスーツが降下する。

このころはまだモビルスーツ用のパラシュートが配備されておらず、輸送機が低空飛行で下ろすしか無いのだ。

「全機、これより徒歩で作戦エリアに向かうぞ」

「了解」

モビルスーツが密林の中を静かに移動する。

「作戦の確認をするぞ。初任務は密林の中にあるジオンの基地につながる橋を破壊し敵の補給部隊を足止め。できれば足止めした部隊を叩くという作戦だ。幸い敵は車両だけらしい。目標の橋の数は三ヶ所。初の戦闘になると思うが、訓練どなりにやればできるはずだ。全機散開し、各目標を叩け！」

「隊長こそやられないでくださいよ。それにしてもケンはおかしいですね。」

「後でケンにもモビルスーツが届くらしいから大丈夫だろう。」

そんなたわいもない会話をしたあと、三機のモビルスーツは各々の目標を叩くため散開していく。

作戦エリア・西の橋付近

「初任務だからって緊張してたけど簡単じゃあねえか。この橋を破壊

すればいいんだろ。おらよつと」

川にかかっている橋が破壊された。その時、モビルスーツのリーダーが反応を捉える。

「きたか」

「こちら、シューリス。補給部隊を補足しました。これは！隊長、敵のモビルスーツの反応があります。俺はこれより攻撃を仕掛けます！」

「シューリス、無茶をするな」

「ザクなんかに負けるわけないすよ」

リーダーが捉えたのは、ザク三機、車両二両だった。

ジムは早速、手に持っている百ミリマシンガンの弾を放つ。しかし、ザクはブースターを器用に使い、避けてしまう。

「速い！」

ザクはお返しとばかりに各々の持っている武器を放つ。

シューリスは避けきれずシールドで防ぐ。

「くっ、強い」

シューリスは、マシンガンの弾幕を張り続けるが全く当たる気配はない。

「何で当たらねえんだよ！」

「シューリス、焦ったら負けだぞ」

「隊長！」

「無茶をするなといったろ！」

「すみません。今後、気を付けます」

「とりあえず、ザクを撃破するぞ」

「はい」

ラグスは、バズーカをザクの足下に向けて放つ。放たれた弾はザク付近の地面に当たり砂ぼこりを立て、ザクが怯む。

「今のうちに、体勢を立て直すんだ」

「了解」

陸戦型ジムは体勢を立て直し、再度発砲する。マシンガンから撃たれた弾はコックピットに直撃する。さらにそこにラグスがバズーカを撃ち込み、ザクは四散した。

「よし、一機！」

「サクリスそっちはどうだ？」

「目標である橋は落としました。今のところ敵影は確認できません」

「了解した。引き続き警戒してくれ」

「了解」

「シユーリス、俺が囮になる。その間に背後に回りザクを撃破してくれ」

「了解しました」

陸戦型ガンダムはバズーカの残った弾をすべてザクに撃ち込む。そしてザクが怯んでるうちに腰にマウントしていた百ミリマシンガンを取りだしザクに走って近づいていく。その間にシユーリスは背後に回る。

「おらー！ こっちだぞ」

ラグスはマシンガンの弾をザクに向けてばらまく。ザクはシールドを使って防ぐが、背後から陸戦型ジムのビームサーベルで縦に真っ二つにされる。

「よし、あと一機だ」

ラグスは弾幕をかくぐりザクに近づき、蹴りを入れる。そして、コックピットに取り出したビームサーベルを突き立ててザクを沈黙させる。その間にシユーリスは二両の車両をマシンガンで撃破する。

「終わった」

「サクリス、基地に帰還する。合流地点まで来てくれ」

「了解しました」

「隊長、助けに来ていただきありがとうございます」

「いや、今回の作戦は俺のミスだ。もっと敵の戦力を把握するべきだった」

「いや、俺が焦ってしまったせいです」

「まあ、過ぎたことは仕方ない。とりあえず基地に戻ろう」

「はい」

ラグスとシユーリスは合流地点でサクリスと合流し、ミデアで自分

たちの滞在する基地に帰還していった。

中央アジア・連邦基地

「シユーリス、今日はすまなかった。俺の把握ミスだ」

「初めての任務ですし、全然気にしてないですよ」

「そうか。ありがとう」

「それにしてもあのザクを簡単に撃破できるなんてすごいですね」

「連邦のモビルスーツは優秀だな」

その時、基地司令の秘書が入ってきた。

「ラグス少佐、司令が呼んでおります」

「わかりました。すぐにうかがいます」

司令室

「司令、お呼びでしょうか」

「ザクを三体倒したらしいな。」

「はい。最初モビルスーツの存在は確認されていませんでしたが、部下のシユーリスが遭遇し私と二人で撃破いたしました」

「そうか。そんなに固くならなくていい。連邦の量産型モビルスーツがジオンのモビルスーツを倒したのは今回が初めてなのでな。問題点や指摘があれば聞きたいだけだよ」

「はい。ジオンのモビルスーツは三機一小隊で行動しています。また、各機体に役割があります。なので、連邦も支援や護衛などに特化したモビルスーツを作るべきだと判断しました」

「ありがとう。レビル將軍にも伝えておくよ」

「ありがとうございます。失礼いたします」

ラグスは出ていこうとする。

「あつ、そうだ。次の任務は明後日だ」

「承知しました」

指令室からの帰り道、ラグスは不意に呼ばれ、振り返る。

「ラグス！」

「ライダーズ技師、どうされましたか？」

「明後日の任務で使用する百八十里リキャノンが届いたぞ。結構癖があるから明日は訓練してくれ」

「了解しました。ありがとうございます」

「あまり気を張りすぎるなよ」

「はい」

その後ラグスは少し雑談をしてライダーズと別れ寝室に向かっていった。

第三話

二日後・中央アジア連邦基地

「今回の作戦は、密林地帯を飛行するガウ三機を撃破するという内容だ。サクリス、お前は俺たちの護衛だ。百ミリマシンガンとバズーカを携帯してくれ」

「了解しました」

「俺とシューリスはマシンガンに百八十ミリキャノンを装備する」

「わかりました」

「今回は、護衛のモバイルスーツが確認されているらしい。サクリスは特に注意してくれ」

「隊長、配置はどうしますか?」

「この地域は、ジャングルの両側が高い崖のようになっている。俺とシューリスが二つの崖に陣取ってそこから狙撃する。いいな」

「了解しました」

「それでは出撃するぞ」

「はい」

三機はミデアに載せられ運ばれていった。

作戦地域

「シューリス、キャノンの組み立ては昨日やったからわかるな」

「もちろんですよ」

「すぐに組み立てろよ」

「組み立て完了しました」

「そうか。よし、ガウが来るまで待機だ」

「レーダーに反応をキャッチしました」

今回から周囲の索敵のためにホバートラックが配備された。新人オペレーターからそう通信が入る。

「了解した」

「シユーリス、聞こえているな！」

「はい」

「ガウがこっちに来る。シユーリスは右側のエンジンを狙ってくれ」
「了解しました」

ガウが作戦地域に突入する。数分後、二機のモビルスーツから弾丸が発射され、両翼のエンジンを貫く。ガウは推力を失い地上に墜落していくが、途中でモビルスーツが降下する。

「レーダーに反応あり。ガウよりモビルスーツが発進した模様。数、三」

「サクリス、こっちに敵モビルスーツが近づいて来ている。迎撃頼むぞ」

「了解」

サクリスの陸戦型ジムが動き出す。

「シユーリス、俺たちも次のガウが来るまで援護をするぞ」

「わかりました」

ラグスとシユーリスは走って来る内の一機に狙いを定め、弾丸を発射する。放たれた弾はザクの頭部と左腕を貫通し、ザクは倒れる。

「二機」

続いてサクリスのジムから放たれたバズーカの弾がザクのコックピットに直撃した。ザクは四散し散っていった。

「隊長、サクリスのやつ弾速の遅いバズーカをザクのコックピットに当てやがりましたよ」

「ああ、俺でもザク自体に当てるのが難しいのにコックピットに当て

るなんてさすがだぜ」

最後のザクは仲間がやられたことに動揺し、動きが止まる。サクリスはそこを見逃さずにビームサーベルでコックピットを突き、撃破する。

「任務完了つと」

「よし、ガウが来るまで待機だ」

「レーダーに次のガウの反応をキャッチ。さらに、地上及び上空に熱源多数。ザク三機、ドップ六機です」

「了解した。シユーリスまずは、ガウだ。コックピットを狙え」
「了解」

ラグスとシユーリスはキャノンを構える。そこから放たれた弾丸は見事にコックピットと後方のモビルスーツ格納庫に直撃する。さらにそこから誘爆が広がり、ガウは空中で四散した。

「あとは、雑魚どもを片付けるぞ」

ラグスとシユーリスはマシンガンに持ち替える。そしてそこから細かい弾幕を形成し、ドップを撃墜していく。一方、サクリスは一体のザクの足元にバズーカを放った。放たれた弾は足に直撃し、足を吹き飛ばす。さらに、爆発の破片が近くにいた他のザクに飛んでいき、よろけさせる。サクリスはそこを見逃さず、マシンガンでザクを蜂の巣にしていく。ザクは四散し、破片をジャングルへと撒き散らす。

「こっちは倒したぞ」

「了解した。警戒を続けてくれ」

「あつ、隊長！ 後続のガウが引き返していきます」

「なんだと！ オペレーター、ガウの位置を転送してくれ」
「了解」

「シューリス、ちよつと移動するぞ」
「了解」

ラグスとシューリスはブースターを使い、地点を移動した。

「シューリス、データを転送した。それを元に撃つんだ」

「いや、多分当たりませんよ」

「いいから、やるんだ」

「了解」

シューリスはデータを元にキャノンを構え、弾丸を発射する。放たれた弾は、姿が見えないガウの発進口からコックピットを貫いて通りすぎていく。数秒後、ガウは四散した。

「あたっただと?」

「さすがだ、シューリス。任務完了だ。帰還しよう」

「わかりました」

迎いのミデアが到着し、三機は基地に帰還していった。

連邦基地・休憩室

「サクリス、今日はすごかったな。バズーカを動いているコックピットに当てるなんて並の奴じゃできないぜ」

「いや、たまたまだから」

「謙遜するなよ」

「そうだぞ、サクリス。一人でザクを5機倒したんだ。基地司令も誉めていたぞ」

「いや、隊長までやめてくれよ。本当にたまたまだから」

「そういうえば、ケン。一週間後にモビルスーツが届くぞ」

「ケンは何撃戦が得意だから、支援系のモビルスーツですか?」

「そうだ。このモビルスーツ、RX-177-2ガンキャノンだ」

「ガンキャノン、これが俺のモビルスーツ」

「ケンには、中距離から作戦の支援をしてもう。いいな」

「喜んでお受けします」

「そうか。それはよかった。ところで次の作戦についてだが
……………」

その夜は四人で次の作戦について何時間も話していた。

第四話・前編

中央アジア・密林地帯

「よし、全機いくぞ」

「了解」

今回の任務は、敵基地の攻略。わりと小さい基地なので三人だけの攻略だ。攻略のために、各機ともマシンガンとバズーカを携帯している。

「基地からモビルスーツとドップが出てきたぞ。全機、気を引き締めろ」

「あれは、新手的モビルスーツじゃないですか？」

「そのようだな。あの機体には気を付けろよ。支援用みたいだからビームサーベルの間合いに入れ」

「わかりました」

三機は射撃を開始する。同じくして、三機のザクが各々の武器を放つ。それを三機はブースターでよけ、反撃を加える。

「おらよっ」と

放たれた弾がザクのコックピットを貫く。ザクは四散し破片をばらまく。さらに、上空から撃ってくるドップを片付ける。その直後、爆発の中から一つの弾が飛んで来る。

「シューリスよけるー！」

「あぶねっ!!」

ジムの肩に大きな穴が開く。しかし、関節に被害はない。

「平気か？」

「なんとかってところですね」

「全機、足を止めたらやられるぞ」

「わかりました」

三機は散開し、残りのザクとマゼラアタックを叩いていく。と、その時基地から新たなモビルスーツが出てくる。

「また、増援かよ」

「単なる補給基地じゃ無いんですか」

シューリスとサクラスが文句を言う。

「しようがないだろ。敵もわざわざやられるわけにはいかないからな」

ラグスは弾薬がなくなったマガジンを交換しながら冷静に答える。

「サクリスは俺と一緒に丘の上の支援機を叩くぞ。シューリスは残りのザクとタンクを撃破してくれ」

「了解」

二機は、丘の上を目指し密林を走り抜ける。敵のザクキャノンは腰に装備されているビッグガンを放つ。しかし、弾はラグスたちの後方に着弾する。

「サクリス、相手は手慣れた。注意しないとやられるぞ」

「了解」

ザクキャノンは肩部のキャノンを放つ。放たれた弾をサクリスはシールドで防ごうとするが腕ごとえぐりとられる。

「サクリス、平気か？」

「右手は動く。大丈夫だ」

「一気に詰めるぞ」

ブースターを吹かし、丘の上にいるザクキャノンに近づいていく。ラグスはビームサーベルを抜き、すれ違いざまに振り抜く。ザクキャノンの胸部には振り抜かれた際の溶けた筋が残る。さらにラグスはビームサーベルを後ろからコックピットに突き立てる。

「よし。とりあえずはなんとかなったな。シューリス大丈夫か？」

「大分きついですよ」

「そうか。いまいくぞ」

一方のシューリスは、さらに増えた敵からの集中攻撃を受け右手首と左膝の装甲を失い、あちこちにザクマシンガンの痕がついていた。

「こんなにやられたのは初めてですよ」

「よく耐えた。後は任せろ」

陸戦型ジムに張り付いているザクに向かってマシンガンを発射し

引き離す。さらに、周りのマゼラアタックを撃破しザクに切り込むための突破口をつくる。そこに、サクリスが腰に携帯していたバズーカを撃ち敵を怯ませる。ラグスはブースターを使って肉薄し、近くにいた一機のザクに向かってビームサーベルを振るう。しかし、ザクは、間一髪のところで回避する。そして、ヒートホークを出しビームサーベルと切り結ぶ。そこに、他のザクから援護のマシンガンが届く。ラグスは、ギリギリのところまで避ける。実質三対一だがシューリスのジムは限界を迎え、サクリスのバズーカはラグスまで巻き込みかねないので撃つことが出来なくなった。一方のラグスは、一人考えていた。こんな小さな基地にこれだけの戦力があるのだろうか。

「オペレーター、基地に援軍要請を出してくれ。この基地には何かがある」

その頃……

「何？ 第四補給基地が攻撃を受けているだと！ すぐに援軍を向かわせろ。あそこには、オデッサのマ・クベ司令に届ける鉱物がある。なんとしても失わせてはならない。急げ！」

「はい」

基地司令はすぐにガウ三機を向かわせた。

「隊長、基地より返信が来ました。「いま、たまたま近くで任務を終えた部隊がいる。その部隊を向かわせた。部隊が到着次第、被弾した機体は撤退せよ。」です」

「わかった。オペレーター、ありがとう。サクリス、シューリスを連れて先に後方に戻れ。ここは、俺一人で持ちこたえられる。急げ！」

「了解」

「隊長やられないで下さいよ」

サクリスはシューリスのジムを連れて、ホバートラックのある後方

に撤退していった。ラグスは、援軍が来るまで持ちこたえるために一度距離をとる。そして、バズーカに持ち替えザクに向かって放つ。しかし、弾は当たらずに後ろの土に当たり煙を上げる。続けて二発目を撃つ。今度は一番前にいたザクの左足に当たり、吹き飛ばす。ザクはバランスを崩して転び、操縦系統をやられたのか動かなくなる。そんな中ホバートラックのソナーが何かを捉える。

「このエンジン音は！ 隊長、ガウが三機接近しつつあります」

「なんだと！」

「はい。確かに、三つ確認できます」

「くそ、どうする」

「待ってください！ 一機が墜落していきます」

「やつと来たか」

「反応、三。連邦のモビルスーツです」

「こちらは特務小隊スレイヴレイス。隊長トラビイス・カー克蘭ドだ。遅くなつてすまない。これより、支援する。」

第四話・後編

「これより、援護する」

「ありがたい。よろしく頼む」

スレイヴレイスと呼ばれる部隊は、各々の持ち味を生かし攻撃を加えていく。まさに、一人一人が他の人の持ち味を生かしながら自分の長所を出していくという理想の部隊像を実現していた。

「スゲーな。皆が助け合いながら行動しているぜ」

「ああ。本当にすげーぜ」

破損が酷いシューリスとサクリスの機体はミデアにつまれ回収されていった。だが、シューリスとサクリスはホバートラックに残りスレイヴレイスの戦闘を見て、勉強をしていた。

「おらよっー！」

一機、また一機と敵を倒していくスレイヴレイス隊。それは、まるで死神にとりつかれているようだった。

「しよがない。基地を放棄する。なんとしても鉱物だけは持ち出すぞ」

「はっ」

基地司令は、基地を放棄し逃げることを決断した。ジオンが戦うために必要な鉱物の持ち出し準備をし、ザクやドップが引き付けているうちに静かに脱出していった。

「これで最後だ」

空を飛びながら爆弾を投下してくるガウを落とし、戦闘は終了した。辺りには、ザクやガウ等の破片が広がっていた。

「ふう、終わったか」

「手伝っていたいただきありがとうございます」

「いやいや、たまたま近くにいたから来ただけさ。改めて、トラビイ

ス・カークランドだ。よろしく頼む」

「第十五機械化遊撃小隊隊長グラディ・ラクスです。共同作戦等で一緒に戦いたいものですね」

「そうだな。そうだ、敬語は使わなくていいよ。あと、また会えたら酒でも飲もうぜ。じゃあな」

「ああ、じゃあな」

スレイヴレイスはミデアに載って帰っていった。その姿を見送り、ラクスは、基地施設の方に向かっていった。

「これは……」

基地内部のパソコンには、ジオンにとって重要な資源やモビルスーツに関する情報がファイルに入って保存されていた。

「オペレーター、この情報をジャブローに通信で届けてくれ」
「分かりました」

ラクスは、基地内部を見て回るが資源やモビルスーツなどは残されていないなかった。

「基地に戻るぞ。ミデアを呼んでくれ」

「了解しました」

ラクスの陸戦型ガンダムとホバートラックはミデアに積まれ、基地に戻って行った。その道中、

「隊長、スレイヴレイスは化け物ですよ。あんなに連携できるなんてすごいっすよ」

「ああ、俺も見えていてびっくりしたよ。俺らもあんな風になれるといいな」

改めて部隊の連携を重要に考える二人であった。

中央アジア・連邦基地

「今回は、大変だったそうじゃないか」

「はい。ただの補給基地かと思っただら敵の資源などがおいてあり、重要な基地だったみたいです」

「でも、君たちは連邦にとって大切な情報を手にいれてくれた。これで連邦のモビルスーツ水準は大幅に上がる」

「役に立てたなら光栄です」

「それでこの件についてレビル將軍が直接お話ししたいそうだ。君たちの機体はしばらく修理しなくてはならないし、休暇だと思ってジャブローにいつてくれないかね」

「分かりました。では機体の方はよろしくお願いいたします」

「任せてくれたまえ」

「では、失礼します」

ラグスは司令室をあとにする。

後日・ジャブロー

「君たちが第十五機械化遊撃小隊の四人だね。私はヨハン・イブラヒム・レビルだ。よろしく頼むよ。」

「第十五機械化遊撃小隊長グラディ・ラグスであります。今回はこのような場を設けていただきありがとうございます」

「そう固くならなくていい。君たちが手にいれてくれたジオンの情報のお陰で連邦が開発しているジム等の問題点が解決した。これにホワイトベース隊のガンダムのデータをフィードバックさせれば完成することができる。」

本当に君たちのお陰だ。ありがとう」

「いえいえお役に立ててよかったです」

「そこで、君たちを私直属の部下にしたいのだがどうかね」

「私たちなどでよろしいのですか」

「ああ、なにぶんまだモビルスーツはそんなに配備されていないなくてね。私直属の部下が欲しいと思っていたんだ。受けてくれるならでは手続きをしよう」

「將軍、ひとつよろしいですか？」

「なんだね」

「今回の情報をつかめたのは、スレイヴレイス隊の活躍があつてこそです。どうか、彼らにも」

「そうだね。彼らにも功績に値する報酬を与えておこう」

「ありがとうございます」

「このあとラグスたちとレビルは前線の問題点などについて熱く話し合った。」

「君たちの機体の修理はまだかかるだろう。ジャブローでゆっくりしていくといい。今日は楽しかったよ」

「はい。失礼します」

「またすぐに会うことになるだろうがね」

「楽しみにしています」

ラグスたちは部屋を出ていく。

「グラディ・ラグスカ。いい部下になりそうだ」

「隊長、レビル將軍は部下想いでいい人じゃないですか。そう思いませんか?」

「ああ、俺もそう思うよ」

ラグスたちは三日間ジャブローに滞在し、中央アジアに帰っていった。

「レビル將軍の直屬になるそうだね。おめでとう」

「ありがとうございます。ここで過ごした一ヶ月半はとても楽しかったです」

「そうか。いつでも戻ってきたまえ。いつまでも待っているぞ」

「はい。ありがとうございます。失礼します。司令お元気で」

「貴殿らの健闘を祈る」

司令は、ラグスたちに敬礼をしてくれた。ラグスたちも敬礼で返し部屋を出ていく。

「この基地も、今日で最後か。なんか名残惜しいですね」

「ああ」

ラグスたちは荷物をまとめ基地をあとにした。

第五話

ジャブロー

「改めまして、今日からお世話になります。第十五機械化遊撃小隊であります」

ラグスたちは、ジャブローの職員たちに挨拶をしていた

「俺がこのジャブローの技師長、アベルト・リンクスだ。君たちの機体の整備は俺に任せろ」

「ありがとうございます。よろしくお願いします」

「そうだ、機体ついでに言うが、陸戦型ガンダムにビームライフルが支給されたぞ。後で陸戦型ジムにも届く予定だ。もう少し辛抱してくれよ」

「わかりました」

ラグスは、ビームライフル調整のためジャブローの訓練場に向かっていった。

「最初の任務だが、近々ヨーロッパのオデッサを攻略する。レビル將軍の乗るビッグ・トレーはドーバー海峡を渡って進軍する予定だ。君たちには先にその通過予定の付近にいるジオン軍のモビルスーツを撃破してほしい」

「わかりました。これよりヨーロッパに向かいます」

ラグスたちは、新しく支給されたミデア改でジャブローを後にした。

ヨーロッパ・ドーバー海峡周辺地域

「あと五分で作戦地域です。パラシュート降下の準備に入ってください」

「了解です」

「今回からケンも参加する。各員情報共有しろよ」

「わかってますよ」

「作戦地域です。降下してください」

「全機、いくぞ」

ミデアから次々とモビルスーツが降下していく。最後にホバートラックが降下して地上に降りる。

「ホバートラック、索敵を始めてくれ」

「わかりました」

ホバートラックの後方からソナーがせりだし、探知を始める。

「ここから東に一キロ地点に反応十六、十三はザクですが残り三はわかりません。新型だと思われまます」

「わかった。ホバートラックは索敵を続けてくれ」

ラグスたちは、荒野を進み始める。そのさきには、大きな盆地がある。そこに敵モビルスーツが潜んでいる。

「ケン、あの盆地にキャノンを撃ち込んでくれ」

「分かりました」

ケンのガンキャノンは、射撃態勢をとるために姿勢を低くする。そして両肩のキャノンから弾が発射される。二門の砲から発射された弾は、大きな楕円を描きながら飛んでいき、盆地の後方に着弾する。着弾した付近には砂ぼこりが上がり、敵を動揺させる。そして数分後、盆地からモビルスーツが出てくる。

「よし、モビルスーツをあぶり出せた。各個撃破せよ。ただし、新型には気を付けてくれ」

「了解」

各自、持っている武器で戦闘を開始する。ラグスは、ビームライフルを射つ。そして放たれたビームはいともたやすくザクのコックピットを貫く。

「こりや強いぜ」

ラグスは次々とザクを破壊していく。

一方のシューリスとサクリスは二人がかりで新型モビルスーツ一機と戦っていた。接近戦闘に特化しているグフは、専用装備のヒートロッドを伸ばしシューリスのマシンガンを絡めとり電気を流して爆発させる。

「くっ」

爆発をシールドで防ぎ、右手でビームサーベルを引き抜く。そして、グフのサーベルと切り結ぶ。そして左手でもビームサーベルを引き抜き、グフの右足を切り裂く。

そこにサクリスがバズーカを叩き込み、グフを爆発させる。その時、

「サクリス！ 後ろだ！」

シューリスが叫ぶが、サクリスの機体と被っているので射撃することができない。一方のサクリスもとっさのことで回避が間に合わない。だが陸戦型ジムに攻撃が当たることはなかった。ケンのガンキャノンから放たれたビームがグフのコックピットを横から貫き、グフを無力化していたのだ。

「ふう、助かったぜケン」

「いえ、サクリスさんが無事で良かったです」

「あと三機だ。頑張るぞ」

「はい」

シューリスたちは残りのザク二機を撃破した。ラグスもビームライフルとビームサーベルの連携攻撃でグフ一機を倒し戦闘が終了した。

「後方より、モビルスーツ接近中。援軍だと思われます。五機です」

「分かった。全機これが終わったら帰還するぞ」

「了解」

ラグスたちは、動き始める。一方のジオンモビルスーツはそのまま前進を続ける。

「当たれ！」

しかし、放たれたビームは回避されてしまった。

「ホバー移動だと！」

「バズーカで足を止めるからそのうちにやってくれ」

サクリスがドムの足元にバズーカを放つ。そこに砂ぼこりが舞い上がった。そしてドムのホバー機構が砂を吸い込み停止する。

「今だ！」

ラグスたちは、火力を集中させて撃破する。

「あっさりで行けましたね」

「ホバーの弱点をつけたからな」

「付近に敵反応ありません」

「しかし次々と新型モビルスーツが配備されますね」

「ジオンのモビルスーツ開発部は異常だよ」

「任務も完了しましたし、帰りますか」

「そうだな。ホバートラック、ミデアを呼んでくれ」

「分かりました」

数分後ミデア改が接近し、四機と一両を回収する。

ビッグトレー内部

「ご苦労だった。これよりオデッサ作戦を開始する」

連邦が総力を上げて行うオデッサ作戦が開始された。

第十五機械化遊撃小隊もすぐに戦線に復帰することとなる。

第六話

連邦が総力をあげて行うオデッサ作戦が開始された。

補給を終えた第十五機械化遊撃小隊は左翼前方の敵の攪乱任務についていた。

「全機、ビッグトレーに敵を近づけさせなよ。ここですべて落とすんだ」

「分かっていますよ」

ラグスたちは、戦闘を開始する。辺りから出てくるザクやグフを撃破していく。だがいくら倒しても数が減る気配はない。ジオンもオデッサを失ってしまうと資源が確保できずに足らなくなってしまうからだ。

「くっ、さすがに数が多いな」

「そうですね」

そんな会話を続けていると敵モビルスーツの間を縫うようにビームが飛んでくる。

「全機、よけろ！」

「あぶね！」

「なんで、ジオンがビームを使っているんだ？」

「基地のメガ粒子砲だ。あれに当たったらひとたまりもないぞ。あれから叩くんだ！」

「了解」

基地からはハリネズミのように砲台がせりだしている。そこから厚い弾幕が形成されているのだ。また、基地付近のトーチカからも弾がしきりに発射されている。ラグスたちは、弾を避けながらトーチカを破壊していく。そんな最中、付近を索敵中のホバートラックから通信が入る。

「ラグス隊長。東から新手の部隊が接近しています」

「分かった。ありがとう」

「隊長、あれを！」

旋回し言われた方向に顔を向けると、空を飛ぶ連邦のフライマンタや61式戦車などを次々と破壊していくジオンのモビルスーツが見えていた。

「あれか、大分手慣れなようだ。油断したらやられるぞ」

「分かってますよ」

「ケンは後ろからの支援に徹してくれ」

「了解」

ケンのガンキャノンが後ろに下がっていく。ラグスは弾薬を補充し、敵を見据える。

「グフの改良型が二機に、ドム型が一機か。火力では完全に向こうの方が上だ。機動力で圧倒するしかないな」

ラグスたちは、ブースターを器用に使って近づいていく。その頃にはジオンのモビルスーツもこちらに気付き、弾幕を形成してくる。

「ちきしよう！ 弾幕が厚すぎる。近づけねえ」

「シューリス慌てるなよ。必ずチャンスはある」

「ええ、わかってます。」

「ケン。牽制射撃を頼む！」

「了解です！」

数秒後、二つの弾丸が敵部隊の近くに着弾する。その爆風と、振動により敵部隊は一瞬だけ動きを止める。

「今だ！ 全機切り込め！」

ラグスたちはビームサーベルを展開し、敵部隊に接近していく。そしてすれ違いざまに一閃する。しかし、あと少しというところで避けられてしまう。

「隊長、あの両腕銃器野郎は俺がやります」

「分かった。任せるぞ。サクリスはドム型を頼む」

「了解」

シューリスとサクリスはそれぞれの敵との対決に入る。ラグスも、目の前にいるグフカスタムと対峙する。そして数秒後、同時に腕を振

るい刀身同士を切り合わせる。

「きさま、何者だ！」

「おれは、第十五機械化遊撃小隊隊長グラディ・ラグスだ。お前は？」
「俺はライカス・グロイダーだ。この戦場で会えたことを嬉しく思うぞ。しかし負けぬ！」

「くそっ！」

二機は一度離れ、再び切り結ぶ。さらに二機は腕を振るうがラグスの方が一秒速く、グフカスタムの右腕に傷を付ける。

「くっ、強い。しかし!!」

グロイダーは陸戦型ガンダムの頭部を左手の三連ガトリングで破壊する。

「うっ！」

「これでチェックメイトだ！」

グフカスタムは陸戦型ガンダムのコックピットにガトリングを向けて撃とうとする。しかし、

「隊長！」

ケンのガンキャノンが間に割り込み、グフカスタムに蹴りを入れる。

「ちっ、操縦系統がいかれたか。撤退する。全機、続け！」

数分後、敵部隊は完全に撤退していった。

「隊長！ 大丈夫ですか？」

「怪我はないから大丈夫だ」

「それにしても敵はすごかったですね。お陰で俺たちの機体は負荷が限界です。これ以上は、無理ですよ」

「分かっている。撤退しよう」

ラグスたちの機体はミデアに積みれジャブローに帰還していった。

その後オデッサ作戦は連邦の勝利に終わり、オデッサのマ・クベ司令は戦場で戦っている兵たちを残し、一人ザンジバルで宇宙に脱出していった。残された兵たちは散り散りになってジオン勢力が残っているアフリカ大陸に撤退していった。この勝利により地上のミリタリーバランスは完全に連邦に傾くことになっていく。

「君たち、ご苦労だった」

「いえ、閣下のお役に立てたのなら光栄であります。閣下こそ、オデッサでの勝利おめでとうございます」

「ありがとう。それにしても君たちには、きつい任務にばかりつけてしまつてすまないね」

「いえ、全然大丈夫です」

「今、ジムを改良した高性能機の開発をしているところだ。それが完成次第君たちに回す予定だから許してくれたまえ」

「いえ、願つてもないことです」

「これから戦場は宇宙に移るだろう。しかし、君たちにはまだ地上でやってもらいたいことがあるんだ。やってくれるかな?」

「はい、やらせてください」

「そうか。それでは機体の修理が終わり次第、シベリアにあるジオン軍の基地に向かって欲しい」

「分かりました」

「私は先に宇宙で待っているぞ。作戦が終わったら宇宙に上がってきて欲しい」

「はい。失礼します」

「ラグス隊長！」

「リンクス整備長、どうされましたか？」

「新しい任務が出たらしいな」

「はい」

「君たちの機体は次の任務が最後だ。これ以上負荷がたまったら動かなくなるぞ」

「分かっています」

「しかし、任せておけよ。最後の戦闘で活躍出きるようになるまで、しっかり整備してやるからよ」

「ありがとうございます。しかし、整備長ともお別れとなると寂しいですね」

「気にするな、戦場での別れはつきものだからな」

「お世話になりました」

「元気でな。死ぬんじゃないぞ」

「はい」

その後リンクス整備長は悲しそうな顔で去っていった。

ラグスは寝室に戻り、つかの間の休暇を楽しむのだった。

第七話

シベリア・ジオンH L V 打ち上げ基地

ユーラシア大陸北部にあるシベリアのH L V 打ち上げ基地では、オデッサで敗走したいくつかの部隊が集結しソロモンに向けてのH L V 打ち上げを待っていた。

ラグスたちは基地の付近にある大きな森林に隠れ、基地を偵察していた。

「熱源反応だけでも七十を越えているぞ。その他に今この基地に向かっている部隊もいる。くつ、厳しいな」

「もうちよいでオデッサからの部隊が到着します。それまで待ちましょう」

「そうだな」

基地内には見えるだけでも四十、熱反応は七十を越えていたのだ。しかも基地の中心部にある発射場ではH L Vが発進準備に入っていた。

「隊長！ H L V が発進準備に入りました！」

「なんだと！ オペレーター、オデッサの部隊はまだなのか！」

「はい。吹雪の影響で到着が遅れています」

この作戦のためにオデッサから攻略部隊が到着するはずだったが、しかし、天候が急変し到着予定時間から大幅に遅れていた。

「くつ、仕方ない。作戦を実行するぞ。全機突撃。ケンにはH L V を狙ってくれ」

「分かりました」

H L Vを狙撃し破壊するケンを置いて、ラグスたちは基地に侵入していく。

基地内に侵入するとすぐに警報が鳴り響き、H L Vで脱出予定の部隊が武器を携行し向かってくる。

「敵、向かってきます」

「全機、へまするなよ」

「分かっています」

各々が携行している武器を発射し始める。発射されたビームはグフやドムの装甲またはコックピットに向かって飛んでいき、溶かし貫通していく。しかし、倒しても倒しても敵は減ることを知らない。

「数が多すぎますよ」

「口じやなくて手を動かせ、シユーリス」

「分かっていますよ」

基地からは、次々とモビルスーツが出てくる。さらにマゼラアタックやドップなど基地にある全戦力を投入してくる。さらに味方が倒されるたびに士気が上がり敵からの弾幕が厚くなっていく。

数十分後になると基地には、モビルスーツやドップなどの残骸が散らばり墓場と化していた。それでもザクやドップは諦めずに向かってくる。もう後ろには引けないので当然のことではあるが何かがおかしいとラグスは感じていた。その時、基地の中心部で大きな爆発が起こる。

「隊長、発進態勢に入っていたH L Vの破壊に成功しました」

「そうか。よくやった。とりあえずH L Vは大丈夫だろう。ガンキヤノンでは不利だ。後方に下がってくれ」

「分かりました」

「ラグス隊長、敵の新たな援軍が到着します。あつ！ この反応は、オデッサで戦ったあの部隊です」

「なんだと！ 全機、警戒しろ」

そして、ついにあの部隊が姿を現す。

「オデッサぶりだな、ラグス少佐。今度こそ決着をつけさせてもらうぞー！」

オープン回線を通じてグロイダーが呼び掛けて来る。

「それはこちらのセリフだ」

「うちの部下たちもまた戦いたいといっているな。全員一対一で戦おうじゃないか。」

「いいだろう。シュールリス、サクリス大丈夫か？」

「自分よりも部下の心配か？ よっほど腕に自信があるようだな。一度負けた身でありながら。」

「負けてなどいない」

「そうか。だが今回は勝たせてもらおうぞ。」

そう言っただけグロイダーは左手のガトリングをこちらに狙いを定め撃つてくる。

「ちっ！」

ラグスはブースターを使って回避行動に移る。避けきれなかった弾はシールドで防ぎその間に、エネルギーの切れたビームライフルを捨てマシンガンに持ち替え反撃を開始する。

「甘いな!!」

グフカスタムはシールドを使わず見事に避けてしまった。さらに反撃も同時に行ってくる。

「くそっ！」

「君はその程度なのか。残念だ。やらせてもらうぞ。」

グロイダーは射撃の間を縫って切り込んで来る。ヒートサーベルで切りかかってくるが、ラグスはとっさにビームサーベルを抜き刃で受け止める。

「速い！ しかしこっちも負けてられない！」

ラグスは、ヒートサーベルを押し返しグフカスタムを切りつける。コックピットの装甲が溶け内部が露出する。

「やっ和本気を出したか。だがこれからだ！」

グロイダーはさらに勢いを増し切りかかってくる。ラグスはシールドを使って防ぎ、反撃に出る。しかし攻撃の際に出る一瞬の隙をつかれ、ヒートサーベルの鋭い突きを受けてしまう。幸いすぐに回避行動に入ったので左胸上部の装甲が溶けただけで済んだが次は避けきれないとラグスは感じていた。その時、基地の端で轟音と共に白い煙が上がりH L Vが上昇し始める。

「なにー！」

ラグスはHLVに向かって腰から取ったマシンガンに向けようとするが、グフカスタムに邪魔されてしまう。

「やらせないぞー！」

HLVは上昇を続け宇宙に脱出していった。

「くそー！」

ラグスはこちらに接近しつつあったグフカスタムの右太ももを切断する。それと同時にグフカスタムのヒートサーベルが、陸戦型ガンダムの左腕を貫く。右足を失ったグフカスタムは地面に倒れ、グロイダーは脱出していった。

「今回は見逃してやろう。」

「待て！くそ、回路がいかれたか！」

陸戦型ガンダムは関節への負荷が限界を迎えが回路をやられ動くことができなくなった。

第八話

一方のシューリスは苦戦を強いられていた。

「くそっ！ もう交換用のマガジンがねえ！ どうする。接近戦に持ち込んでも絶対に負けるぞ。だけどな！」

最初の戦闘と今の戦闘でマシンガンのマガジンは底をつき残り五十発だけとなってしまった。しかし、相手はまだ弾薬が残っているうえにヒートサーベルも二つ装備している。接近戦に持ち込んでも負けるのは明白だった。それでもシューリスは覚悟を決め、ビームサーベルを両手に装備しグフに向かっていった。

「おらよー」

右手のサーベルを使つて、グフのヒートサーベルと切り合わせる。そこに左手のサーベルを使つてコックピットを貫こうとするが、見切られ避けられる。さらにお返しとばかりに振るったグフのヒートサーベルがジムの左手を捉え、溶かしながら切断する。

「ちっ！ 速い!!」

さらに追撃をしようとしていたグフだったがその直後、轟音と共にHLVが発進し一瞬注意を逸らしてしまった。シューリスはそこを見逃さずに右手のサーベルでグフの左胸部を袈裟斬りにする。パイロットはなんとか脱出し基地端に逃げてしまった。シューリスはなんとかだが勝てた喜びと自分の実力不足による嘆きで気持ちが混同していた。

シューリスと違って、サクリスは焦りというものを感じることが少ない。今回もサクリスはのんびりと戦っていた。しかし相手は両刃型の斧を持っていてなおかつドム用のヒートサーベルも装備しており、シューリスよりも接近戦は不利だった。それでもサクリスは焦らずにバズーカを使い、器用に敵を翻弄していく。しかし、ドムはその

高機動を生かし、斧を持って滑るように迫ってくる。それを軽く避けるようにいなしてバズーカをドムに向かって放つ。放たれた弾はドムに向かって飛んでいくがホバー移動で避けられる。ドムは反転しまた迫ってくる。その為、サクリスはビームサーベルに持ち替えて右手で構える。

「くっ！」

ドムがホバー移動の勢いでそのまま刃を振るった。その為自然と勢いがつきドム型特有の質量も相まってすごく鋭い攻撃となる。それを、サクリスはサーベルで受け止める。しかしじりじりと押され、ビームサーベルが装甲に触れ溶け始める。それでもだんだんと押し返していき、やがて完全に立場が逆転し今度はドムの装甲が溶け始める。そのまま押し込んでいき装甲を切断し、右腕を切り落とす。ドムは残った左手にドムのヒートサーベルを持つ。そしてホバーで回転しながら切り込んでくる。ジムの右手は深く切られたことにより回路がショートし動かなくなる。その直後右足で蹴りをドムの腹部を蹴り、バランスを崩させる。バランスを崩したドムにビームサーベルを突き立てようとするが、寸前の所で態勢を立て直してしまい左胸部の装甲を軽く溶かすだけにとどまる。その時基地の端から大きな煙と共にHLVが発進し空に上がっていった。ドムはそれを合図にしたように後退していく。そして数分後、基地の端から一本のシャトルが脱出していった。

「逃げられたか」

「サクリス、そっちはどうなった？」

「HLVの発進を合図にしたように後退していった」

「そうか。」

「このあとはどうする？」

「そうだな。味方ももうすぐ到着するし、俺らは撤退しよう。」

「分かった。これより戻る」

サクリスはラグスのいる基地中央部に向かって歩いていった。

その頃、ジャブローの司令部はキャリフォルニアから発進してきた大部隊を捕捉していた。

「レビル大将、大変です！ キャリフォルニアからジオン軍の大部隊が来ます」

「なんだと！ ホワイトベースが追尾されていたか。急いで防衛態勢を整えてくれ。ロールアウトしたジムも防衛にあたせるんだ。それと、ホワイトベースの部隊にも出撃要請を出してくれ」

「分かりました。すぐに配備させます」

参謀は、部屋を出ていきすぐに部下に指示を出す。レビルは一人、ティアンムと通信していた。

「ジオンがまさかこのタイミングで仕掛けてくるとはな。私もさすがに驚いたよ。それでも本題だが、君は先にルナツーに上がってくれないか？」

「ですが」

「これに負ければ、ジオンは宇宙の守りを固めていくだろう。それが整う前に攻略したい」

「分かりました。宇宙でお待ちしております」

数時間後、ジャブローからマゼラン級とサラミス級が何十隻も発進していった。

「オペレーター、その話は本当なのか？」

「ええ、間違いありません」

「そうか」

その時、味方の部隊が到着する。

「こちらは、オデッサの応援部隊だ。遅れてすまなかった。ほぼ片付いてしまった後のようだな。君たちも知っているとと思うが、ジャブローが攻められることは私も聞いている。そこでだ、私たちの部隊からジムを三体回そう。君たちはすぐにジャブローに向かってくれ。レビル大将からの命令なのでな、言うことは聞いてもらうぞ」

「分かった。ありがとう」

「君たちの健闘を祈る！」

すぐにミデアにジムが三体つまれ、ケンのガンキヤノンも搭載される。そして、ジャブローに向かって飛び立っていく。

第九話

ジャブロー・上空

ジャブローから見える空には、いくつものガウやファットアングルが見えていた。

「敵発見！ 見えるだけでガウ十五機、ファットアングル二十機、ドップ五十機、すごい数です」

「ちっ、対空機銃用意！ 撃てー！」

ジャブローの地上から対空機銃がせりだし、厚い弾幕を形成していく。すぐに、ドップなど装甲の薄い機体から撃墜されていく。それでもジオン軍は降下を強硬し、多数のモビルスーツが降下してくる。しかし、半分以上が降下途中に狙撃され墜落していく。また、無事に着地出来たとしても地上で降りてくるのを待っていたジムに囲まれあっという間に蜂の巣にされてしまう。

「今までのお返しだぜ」

次々にジオンのモビルスーツを倒し、ジムのパイロットたちはどんどん上機嫌になっていく。しかし、

「何だ！ くそー！」

通信が聞こえると同時にジムのうち一機が倒れ爆発する。

「どうした！」

「あっ、あれを！」

そこには、熱帯林に身を潜めていた茶色のモビルスーツ、アツガイが立っていた。

「どこに隠れてやがった！ くそが!!」

連邦のMS部隊はあわてて反撃するが、さらにアツガイの後方から丸々としたモビルスーツ、ゴッグが何体も現れ腹部の拡散メガ粒子砲でジムを倒していく。

「こちら、第四MS中隊。敵の水陸両用モビルスーツが川から侵入した模様。支援を……うわー！」

「どうした、応答しろ！ くそっ！」

通信機からは雑音しか聞こえなくなった。さらに、苦しい報告が続く。

「北西より新たなジオン部隊出現。ガウが六機、ファットアングルが八機です」

「第二陣がもう来たか！」

司令部のモニターには、ジオン部隊が写し出されていた。その時、「ホワイトベースのガンダムの発進準備が完了しました。どこに展開させますか？」

「そうだな。とりあえず地上の防衛に回してくれ」

「了解しました」

ホワイトベースからはガンダム、ガンキャノンが出撃し、地上でザクやグフに対して射撃を開始する。ホワイトベース隊が参戦したことにより、兵士たちの士気がすこし上がる。そんな中、司令部のレーダーが一機のミデアを捉える。

「ん？ このミデアは……。司令！ 第十五機械化遊撃小隊です」

「そうか。これですこしは戦線押し戻せるな。全軍に到達！ これより戦線押し返す。全機、気を引き締めて臨め！ 待機させていたジム部隊を地上に出し、地上に展開しているモビルスーツを撃破せよ」

「了解。通達します」

オペレーターたちが各部門に通信し、命令を伝えていく。

「だいぶ押されていますね」

「そうだな」

「パラシュートがないので低空飛行で下ろします。準備してください」

「了解した」

操縦席から通信が入り、ラグスたちは準備を始める。

そして数分後、ミデアは低空飛行を敢行しラグスたちを地上に下ろす。

「よし、地上での戦いもこれで最後だ。存分に暴れてやれ」

「そうですね。普通のジムだとすこしスペックが足りませんが、暴れてやりますよ」

四機は近くにいるザクたちに向かって射撃を開始する。あつという間にジオンモビルスーツは蜂の巣にされ残骸だけが残る。時を同じくして援軍としてやって来た第二軍からモビルスーツが降下してくる。その中にはザクだけでなくグフやドムなども時おり混ざっている。しかし発進後すぐに対空機銃に撃たれ四散していく機体も多い。間一髪厚い弾幕をすり抜け着地した機体は対空機銃や観測ドームなどを破壊しようと動き始める。ラグスたちはその背後からグフやドムなどに向かってビームスプレーガンを放ち撃破していく。そんな中、司令部から通信が入る。

「至急、至急。水中水路からジオン水陸両用モビルスーツが侵入した。手の空いているモビルスーツ隊はすぐに地下に来てくれ。」

「じゃあ上空の敵は囮かよー！」

「シユーリス、嘆くな。俺たちもすぐに地下に向かうぞ！」

「分かりました」

ラグスたちは現在地からすこし離れたところにある入口に向かい地下へと入っていく。

「地下に侵入した敵の数は？」

「確認出来るだけでズゴック六、アツガイ十五、ゴッグ三、不明機一です。また、北東モビルスーツゲートも突破されそうです」

「地上はだいぶ押し返したな。よし、ホワイトベース隊のガンダムと手の空いた部隊を向かわせろ」

「分かりました」

オペレーターが各部隊に通信を送る。

十数分後、アムロはシャアと戦っていた。その頃、ラグスたちは別方向のゲートに向かっていった。

「敵もだいぶ焦っているな」

「そうですね。この侵攻作戦に負ければジオンは勢いを落とします。今度はこちらが攻勢に出るでしょうね」

「今度は宇宙だな」

「そうですね。ん？ 前方にモビルスーツ！」

「くそ、もうここまで来ているのか？ 全機散開！」

ラグスたちはビルの陰に隠れて様子を確認する。

「まだこちらには気づいていないようですね」

「そうだな。背後に回り込み、一気に叩き込むぞ」

「了解！」

四機は気づかれぬように静かに移動する。そして、狙いを定め引き金を引く。銃口から放たれたビームはコックピットに真っ直ぐ向かっていき、簡単に貫いて四散させる。数機を破壊した直後、残されたモビルスーツたちは撤退を開始した。それを追撃しさらに何機か撃破する。しかし、残りの三機には逃げられてしまう。

「逃げられましたね」

「そうだな」

「敵部隊の完全な撤退を確認した。皆ご苦労だった。補給と休憩が

終わったら全部隊の隊長は、会議室に集まってくれ。」

ジオンが地上のほぼすべての戦力を投入し臨んだジャブロー攻略作戦は失敗に終わった。これにより連邦軍は一気に攻勢に出ることになる。

第十話

ジャブロー・会議室

「皆ご苦勞だった。この戦いに勝利したことにより地球上のミリタリーバランスは完全にこちらに傾けることが出来た。これからの戦いは宇宙となるだろう。諸君らには宇宙に上がってもらいジオンの基地の攻略作戦に参加してほしい。基地を落とせばジオンの勢いは止まり終戦に導けるかもしれん。地球平和の為にもう少し頑張してほしい」

「はい！」

各部隊の隊長たちは頷き、レビルに向かって敬礼をする。

「諸君らの健闘に期待する！」

レビルも隊長たちに向かって敬礼を返し、部屋を後にする。そして、進行役の参謀が口を開く。

「今回の作戦に参加し散っていった者は二階級特進。生き残っている者は一階級特進だ。あとで正式に辞令が出されるだろう。このあとは、各自準備をして宇宙に上がってくれ。以上。解散！」

改めて全員が敬礼をして部屋を出ていく。ラグスも出ていこうとするが、参謀に引き留められる。

「ラグス君、ちよっと話がある」

「何ででしょうか？」

「このあとの君たちの所属の件だが、明日から正式に第一連合艦隊に編入されることとなった。ただ、とりあえずしばらくは陽動任務やジオンの補給線破壊任務についてほしい。ソロモン攻略作戦が発動されるまで感ずかれないからな。今回のためにレビル將軍の配慮でマゼラン級が一隻母艦として配備される事となった。詳細については新しく専属の整備長となったライダースに聞いてくれ。話は以上になる」

「分かりました。失礼します」

ラグスは今度こそ部屋を後にする。

ジャブロー第二格納庫

数分後、ラグスはライダーズに会うために第二格納庫に来ていた。基地のメカニックと話し込んでいたライダーズはラグスを見つけると笑顔でこちらに近づいてくる。

「また会ったな、ラグス隊長」

「ライダーズ整備長、お久しぶりです。中央アジアの基地以来ですね」「今回から専属となった。これからのモビルスーツ整備は俺に任せてくれよー」

「お願いします」

「それで母艦とモビルスーツの件だが、母艦としてはマゼラン級一隻が配備される。ただ、モビルスーツ搭載能力がある後期型つてやつで、四機モビルスーツを搭載できるから俺たちの部隊にはちょうどいいな。武装面では、後方に設置されていた砲塔が撤去された代わりに、左右の艦橋型の構造物をなくして、サラミス用のミサイルランチャーと単装砲が一門ずつ付いている。単装砲は後方にも撃てるようになっていているからとりあえず火力は低下していない。あと、航行能力も多少増加している。一応母艦となるから伝えたぞ」

「ありがとうございます」

「次にモビルスーツについてだが、四人のこれまでの戦闘データから個々の能力に合ったモビルスーツが配備される。ラグスには、射撃に特化したジムスナイパーカスタム。バランスのいいシューリスにはジムインターセプトカスタム、多少格闘と防御に優れているサクリスにはジムガードカスタム、支援専門のケンにはジムキャノンといった風に四人とも機体が違う。あとで各自にモビルスーツのデータを渡しておくから目を通してくれ。話が長くなってしまったな。すまない」

「いえ、大丈夫です。改めてこれからよろしくお願いします」

「五時間後にはマゼラン打ち上げだ。準備してくれ」

「分かりました。シューリスたちに伝えてきます」

ラグスは格納庫を出ていき、シューリスたちが待機している部屋へと向かっていった。

「ラグス隊長！」

「皆、待たせたな。とりあえず全員一階級特進となった」

「隊長、中佐になったんですね。よかつたじゃないすか」

「それは今はいい。皆聞いてくれ。五時間後には宇宙に出る。各自、荷物をまとめて三時間後には打ち上げ場に集合だ。遅れるなよ。あと新しいモバイルスーツが配備される。データは向こうに着いてから渡されるからそれを読んでくれ」

「もう出発ですか。分かりました。準備します」

シューリスたち三人は準備をするために部屋を出ていく。

三時間後

マゼラン級は打ち上げのためブースターの取り付け作業を行っていた。シューリスたち三人は既に集合している。

「全員揃ったな。これよりマゼランに搭乗するぞ。そしたらまず格納庫で自分に配備されたモバイルスーツのマニュアルをもらってくれ。その後、談話室で今後の行動を伝える」

「はい」

全員が領き、マゼランに搭乗する。その後、四人は格納庫に足を運ぶ。

「これがお前たちの機体のマニュアルだ。よく読んでくれよ。くせが強い機体もあるからな」

「分かりました」

四人はライダーズから各機体のマニュアルを受け取り、それを読みながらマゼランの談話室に向かっていく。

「ジムガードカスタムか……。盾にバルカンが内臓されているな。これは確かにくせが強い。格闘もビームダガーか、ライダーズ整備長が言う通りくせだらけだな」

サクリスがマニュアルを読みながら、ラグスに話しかける。

「確かに四機のなかでは一番だな。まあ、俺の機体もけっこうくせがあるけどな」

「スナイパーライフルですもんね。あとビームサーベルが固定式なんでしたっけ？」

会話しながらエレベーターを降り、目の前に見える部屋に入る。

「ああ、ただ使えないことはない。談話室に着いたな。よし、このあとの行動を伝えるぞ」

ラグスは談話室にある椅子に座り、司令官から聞いた作戦をそのまま説明する。

「俺たちは宇宙に上がった後、サイド1近くの暗礁地帯に待機。ソロモンに向かう艦艇を狙う。ある程度回数を重ねて敵が警戒したら、場所を移動しまたジオンを狙う。これを繰り返しソロモン攻略作戦までの時間を稼ぐ」

「なるほど、陽動ですね。分かりました」

その時、部屋全体が揺れ始める。

「発進するか。全員シートベルトを閉めろ。舌を噛むから口は閉じとけよ」

「はい」

その直後、ラグスたちは身体全体に力強いGが掛かり身体が浮く感覚を覚える。数分間気を失っていたが気が付くと外には漆黒の宇宙が見えており、後ろには青く輝く地球が見えていた。

設定集

○グラディ・ラクス

年齢 三十一歳

第二十六航空師団の元隊長であり、今は第十五機械化遊撃小隊長。階級は少佐だが後に中佐となる。性格は基本的に冷静沈着である。基本的に周りの人間に対してはあまり話しかけないが、隊の仲間とライダースだけには気軽に話しかけることができる。把握能力に優れており、シューリスやサクリスにとっさに指示を出すことも多い。射撃と格闘両方に秀でており、地上では陸戦型ガンダム、宇宙ではジムスナイパーカスタムを使用している。

○シューリス・ケラーク

年齢 二十六歳

欧州出身の陽気な若者。その性格からたまにハマをしてラクスに怒られる。ただ実力は本物であり、ラクスと同じく両方に秀でている。航空師団時代はザク一機、ドップ八機を撃破している。基本的にラクスには敬語を使っている。両親と妹をジオンに殺されており、顔には出さないが隊の中で一番ジオンを憎んでいる。地上では陸戦型ジム、宇宙ではジムインターセプトカスタムを使用している。

○ハリストル・サクリス

年齢 二十八歳

オーストラリア出身の無口で小柄な若者。あまり会話が得意では

なく、任務以外ではいつも読書をしている。任務ではそれなりに会話をしているがこれも任務のために嫌々話しているだけである。しかし、戦いを重ねていくごとにだんだんと会話をするようになっていく。余り焦りなどを感じるタイプではない。技術面では、格闘の方が秀でており敵モビルスーツの急所を的確に狙える。しかし、オデッサで出会った部隊だけには急所に一撃を与えることが出来なかったため再戦を願っている。地上では陸戦型ジム、宇宙ではジムガードカスタムを使用している。

○ケン・サクライ

年齢 二十四歳

日本地域出身の小柄な若者。隊に入隊したのが一番遅くなんとなく遅れをとっていると思っている。しかし、誰にでも明るく接する態度からラグスたちには頼られている。後にそれを知り、もっとこの隊の役に立ちたいと思い始める。最初はモビルスーツがなく、後方待機だったが後にガンキャノンが配備され出撃するようになる。実戦を重ねていくにつれ、心身共に成長していく。地上ではガンキャノン、宇宙ではジムキャノンを使用している。

○カリユリス・ライダース

年齢 五十一歳

元航空機乗りだが左手の負傷によりパイロットを引退し、今は整備

士となった。中央アジアで長らく航空機の整備を担当していたが、ラグスたちの専任整備士となりラグスたちと共に宇宙に出る。おやっさん気質で皆から頼りにされている。

○オペレーター

第十五機械化遊撃小隊に配備されたホバートラックの担当オペレーター。マゼラン級でも引き続きオペレーターをしている。

ソロモン戦後

機体一覧

○ジム・スナイパーカスタム

左腕に右腕と同じビームサーベルユニットを装備。スナイパーライフルの代わりに試作型バズーカを携行している。また、右ふくらはぎにはビームスプレーガンを携行。

○ジム・インターセプトカスタム

武装の少なさを補うため、右腕にガードカスタムと同じビームダガーを装備。左腕には試作型小型二連ビームキャノンを携行。また、新しく配備されたフェロウ・ブースターを使っている。

○ジム・ガードカスタム

肩部にガトリングを追加。さらに新しく配備されたE-2ビームスプレーガンを二丁携行。バックパックと肩部スラストターの強化により、推進力が増加している。

○ジム・キャノン〔空間突撃仕様〕

バルザック式360mm ロケット砲を携行。さらに武装強化のためにビームサーベル、防御力強化のためにシールドを追加装備した。

第十一話

第十五機械化遊撃小隊の母艦であるマゼラン級は暗礁地帯に向けて航行していた。

「身体が宙に浮く感じ、不思議ですね。」

艦内は無重力でシューリスはフワフワと浮きながらラグスと話していた。

「ああ、数時間後には暗礁地帯で宇宙に慣れるために操縦訓練を行う。地上とはまったく感覚が違う。しっかり訓練しないとすぐに落とされるぞ。」

「分かっていますよ。三次元機動は難しいですからね。そういえば確か隊長は宇宙軍にいたことが有るんですね。」

「ああ、五ヶ月だけだけだな。開戦後すぐに地上に配置転換されたから、あまり宇宙での戦闘はやったことがないが生き残るために自分の経験から大事なところはしっかり教えるぞ。」

「なんか、隊長が教官に見えてきましたよ。隊長に教えてもらって撃墜されないようにしっかり訓練しないとつすね。」

「いつとくが手加減はしないからな。」

「分かっていますって。」

数時間後、マゼラン級はサイド1近くの暗礁地帯に到着しモビルスーツ四機を下ろしてエンジンを停止した。

「艦長、レーダー以外は全機能を停止。レーダーも感知されないように最低限の出力で頼む。反応が有ったらすぐに連絡をしてくれ。」
「分かりました。」

本来ならばこの艦の中で一番階級が高いラグスが艦長になるべきなのだが、艦長が戦いに出撃してしまつては艦の指揮をとる人が居なくなつてしまうということで、レビル将軍が派遣してくれたアレク大尉がマゼラン級の指揮を取っている。

艦の指揮を取っているアレク大尉は第一連合艦隊の中でもトップ5に入るほど指揮能力と判断力に優れている。ただ、二十九歳という若さゆえに大尉という階級になっているが、少佐に昇進が内定してお

りソロモン攻略戦が終われば正式に少佐となる手筈である。

マゼラン級は完全に航行機能を停止し、暗礁地帯の近くを通るジオン部隊を補足するためにリーダーを最低出力で動かしている。

一方のラグスたちは、ジオンの航行ルートと反対の方向、つまり暗礁地帯の奥で操縦訓練を行うことになっており、小型の岩や戦闘後のデブリの間をすり抜けながら奥へと向かっていく。

「こんな障害物に当たるなよ。」

「こんなんに当たるわけじゃないじゃないですか。」

四機はバックパックと足裏のバーニアを器用に使って間をすり抜けていき、やがて目的の場所へと到着する。

「これから、訓練を始めるぞ。まずは膝下のバーニアを使った緊急回避だ。これからの戦闘はビームが主体になるだろう。銃口が向いたときにはもう撃たれていると思え」

「はい」

「俺が相手役になる。ビームスプレーガンの威力は最低にしてあるが、急所に当たれば撃墜判定になるようにセットしてある。油断するなよ。特にケンは、ガンキャノンからジムに乗り換えたんだ。ガンキャノンのように行動してはすぐに落とされるぞ」

「分かりました」

ケンが領き、訓練が開始される。相手役のラグスはまずシューリスに狙いを定めてビームスプレーガンを放つ。それを回避しようとしてバーニアを吹かすが避ける直前に右肩に当たり判定がつく。それでも強引に回避し終わりシューリスはラグスに通信を入れる。

「これ難しいですよ」

「だから銃口が向いた瞬間に避けないといけないんだよ。次はサクリスだ」

「分かった」

シューリスが下がり、代わりにサクリスが出てくる。

サクリスはモニター越しにラグスのジムを見つめ、腕が動く瞬間を待つ。数秒後、腕が微かに動きサクリスはブースターを吹かして避ける。その後すぐにジムの居たところをビームが通過する。

「サクリス、その感じだ」

「そうだな。ただやはり難しい」

「まあこの回避は最悪の場合だ。とりあえず宇宙ではジグザグに動いて狙いを定めさせないようにしないとだぞ」

「分かった」

その後ケンにも同様の訓練を行ったがあえなくコックピットを貫かれ撃墜判定になってしまった。

「シューリスとケンはこの回避を練習しとけよ。よし、次の訓練に移るぞ。二機づつに分かれ模擬戦形式で訓練だ。周りにあるデブリなどを上手く使って行動するように。いいな」

「チーム編成は俺とサクリス、シューリスとケンだ」

四機は二チームに分かれて散開し、岩の影に隠れる。

数分後、最初に動いたのはケンだった。肩の360mm ロケット砲でラグスたちが隠れていると思われる付近に弾を撃ち込む。爆発が収まり、ケンは辺りを見ようとしますが直後にモニターに映し出されている映像が途切れ、漆黒に染まった。

「くそ！ メインモニターをやられた！」

「ケン、あせつたら負けるぞ！ 一度岩の影に隠れろ」

シューリスがとっさにフォローし、ケンは態勢を立て直す。一度岩の影に隠れ、相手の様子を伺う。

「どうしますか？」

「そうだな。もうそろそろ決着をつけたいな。」

その時、反対側の影からサクリスが飛び出し、近くの岩の影に移る。「ケン、突っ込むぞ！」

シューリスがバーニアを吹かし、サクリスが隠れている岩に向かっていく。その途中で腰からビームサーベルを出し左手で構える。右手のスプレーガンで岩を破壊し、サクリスに斬りかかっていく。サクリスは腕のビームダガーを展開し受け止めるが、直後にシューリスがコックピットに蹴りを入れ、態勢を崩させる。そしてコックピットにビームサーベルを突き立てて撃墜判定となる。しかし、直後にビームがコックピットに当たりシューリスも撃墜判定となってしまう。

「くそ！ ケンあとは頼んだぞ。」

「分かりました！」

肩の360mm ロケット砲を撃ちラグスを牽制し、サブモニターに繋いで右手のビームスプレーガンで狙いを定める。銃口から放たれたビームはコックピットへ真っ直ぐと向かっていくが膝下のバーニアを使った緊急回避で避けられ、右手を破壊判定にするだけにとどまる。

「甘い！」

そう通信があつた直後、無理矢理ブースターで近づいて来たラグスのビームサーベルで袈裟斬りにされケンのジムは撃墜判定となる。

「ケン、キャノンで牽制したまでは良かったがその後一歩も動かないのは良くないぞ」

「はい」

「今日はここまでだ。帰還しよう」

「はい」

四機は、静かに母艦に帰還していった。

第十二話

「暗礁地帯より数キロ先をジオンの艦隊が航行しています。数、ムサイ級3、パプア級3を確認。モビルスーツ隊は直ちに発進願います。」

訓練から数時間後、マゼラン級艦内の士官室で休んでいたラグスたちにそう通信が入る。

「ケンはずぐにパイロットスーツを着用しモビルスーツで発進。シューリスとサクリスはコックピットで待機せよ」

「了解。」

急いで格納庫に向かっていき、パイロットスーツを着用してからコックピットに入る。ラグスとケンはモビルスーツを起動し、発進態勢に入る。それと同時に格納庫横のハッチが開いていく。

「ラグス、ジムスナイパーカスタム出るぞ。」

ラグスは足を使って床を蹴り、外に出ていく。

「ケン、ジムキャノン出ます！」

続いてケンのジムキャノンも格納庫を出て、ラグスの後に続いて移動していく。

数分間暗礁地帯を移動し、やがて二機は暗礁地帯の端に到着する。ラグスは近くの岩に隠れR4ビームスナイパーライフルを構えて、こちらの一番近くを航行しているムサイの艦橋を狙う。それと同じくして、ケンに通信を入れる。

「ケン、ムサイの後ろのパプアを狙えるか？ あいつは足が遅いから、ジムキャノンでも狙えるはずだ。」

「分かりました。やってみます。」

ケンはムサイの後ろを航行しているパプア三隻の内、一番手前のパプアに狙いを定める。

「同時に攻撃するぞ。準備はいいな。」

「いつでも行けます！」

「分かった。三、二、一、撃つぞ！」

スナイパーライフルの銃口から一筋のビームが発射され、真っ直ぐムサイに飛んでいく。それと同時に、ジムキャノンの肩のロケット砲が火を吹き弾を発射する。

ムサイ級・艦橋

「もう少しで、ソロモンに着くぞ。連邦は必ずソロモンに侵攻してくるはずだ。気を引き締めろよ。」

「ですよ。でもソロモンが落ちたらさすがにヤバイですよ。」

「大丈夫だ。ソロモンにはドズル閣下がいらっしやる。落ちやしないよ。」

艦橋では普通の会話が飛び交っていたが、直後に後方を航行していたムサイ級が爆発し、その衝撃波が艦橋を襲う。複数人が倒れ、艦長も体制を崩すが、すぐに椅子に掴まり説明を部下に求める。

「状況、報告！」

「後方を航行していたムサイ級一隻が轟沈しました。」

「レーダー手は何をやつとるんだ！」

「それが、現宙域に連邦軍の反応は全くないんです。」

「そんな……んっ?」

その時、再び衝撃波が艦橋を襲う。

「今度はどうした！」

オペレーターが艦長に状況を伝える。

「パプア級一隻轟沈しました！」

「どこから狙ってやがるんだ。」

モニターを見ていた観測兵が叫ぶ。

「あつ、高エネルギー反応が右から来ます！」

「回避運動、急げ！」

先頭を航行中のムサイが反転を開始した直後、エネルギーが艦橋のすぐ横を通りすぎていく。

「左翼を航行中のムサイの船体中央に直撃。ムサイは火薬庫に引火、爆発しました」

「くそ、ソロモンに連絡を……」右舷より高速で近づく物体を探知。数2！」

「ちつ、対空防衛始め！」

「このまま、けりをつけるぞ。ケンはパプア級を頼む！」

「了解。」

二機は艦隊の懐に侵入し、二手に別れる。ラグスは左ふくらはぎに装備しているビームスプレーガンを右手に持ち、パプア級の前方を航行しているムサイから放たれる弾幕を左右に避けながら向かっていく。そして、ムサイの左右のエンジンブロック、三基のメガ粒子砲、艦橋の順に撃ち抜いてムサイを完全に無力化させる。

一方のケンはパプア級二隻に向かっていき一隻目の艦橋をビームスプレーガンで抜き、二隻目は左船体を肩のキャノンで破壊する。パプア級は弾薬に引火したのか一撃で大爆発を起こし、破片を付近にはらまく。

「こちらは片付きました。」

「こつちも終わった。船に戻ろう。」

ラグスたちはきた道に戻ってマゼラン級に帰還していった。

「隊長、どうでしたか？」

ラグスたちがマゼラン級に着艦すると、シューリスが駆け寄ってくる。

「俺がムサイ級三隻、ケンがパパア級を三隻撃沈した。」

「モビルスーツは出てこなかったんですか？」

「ああ、たぶん物資輸送部隊だったんだろうな。護衛のモビルスーツは全く出てこなかったよ。」

「次は出撃させてくれませんか？」

「でも、シューリスのジムは長距離用の武器持ってないだろ。まず遠距離から何隻かやらないと突っ込むのは無理だからな。それにマゼラン級の護衛もしなければならぬから、やはりこの編成は合っていると思うぞ。」

「そうですね。無理言ってますみませんでした。」

「いや、こちらこそ最初に説明しなくて悪かったな。これからは気を付ける。とりあえず談話室に戻ろう。」

「了解です」

ラグスたちは格納庫を後にして談話室に向かっていった。

「改めて今回は最初に編成を説明しなくてすまなかった。こういうことはやはり最初に言っておくべきだった。」

談話室の椅子に座り、ラグスは皆に謝る。

「遅れて申し訳ないが編成を伝えたい。今回の陽動作戦は、長距離からの狙撃が要となる。よって、近距離型のサクリスと狙撃武器を持っていないシューリスの機体はこの作戦に適していないんだ。そして、この艦の護衛も必要となる。だからシューリスとサクリスはここに

残ってもらおう決断をしたんだ。」

「最初に説明してもらわないと困りますよ。」

シューリスが冗談半分でラグスに軽く怒る。

「そうだな。ただしばらくはこの編成でいきたいと思うんだがすまないな。」

「いや理由が分かれば大丈夫です。この艦の護衛は任せてください。」

冗談を真に受けて謝ってしまったラグスに思わず吹き出してしまったシューリスだったが、マゼラン級を守るといふ編成を理解しそれに従事しようと思った。

その後はたわいもない話で盛り上がり、数時間談話室で話続けた四人であった。

第十三話

「ラグス、ジムスナイパーカスタム出るぞ」

「ジムキャノン、ケン出ます！」

二機はマゼラン級の格納庫を出て漆黒の宇宙を進んでいく。

（今回がこの宙域で三回目の出撃になる。もうそろそろ敵も暗礁地帯に我々が潜んでいることを突き止めるだろう。もうそろそろ逃げないとかもしれない）ラグスは心の中で呟きながら、作戦宙域に向かっていった。

「今回は、チベ級が一隻にムサイ級四隻か。たぶん護衛のモデルスーツもいるだろう。ケン、分かっているだろうが前のようにはいかないからな。まず俺がチベ級をねらう。その後すぐに突撃し、打撃を与える」

「分かりました」

ラグスはスナイパーライフルを構え、スコープを覗いてチベ級の艦橋を照準に合わせる。

「当たれっ！」

引き金を引き銃口から放たれたビームは真っ直ぐチベに向かって吸い込まれていき、チベの艦橋を貫く。しかし、撃沈には至らず数十秒後には格納庫からモデルスーツが六機出撃してくる。

「俺が突っ込む。支援は任せたぞ」

「了解」

ラグスはビームスプレーガンに持ち替えて、暗礁地帯から飛び出しジオン艦隊の中に突撃していく。

「陽動部隊に食いついたか。全機、暗礁地帯に突入。敵の母艦を探せ！」

「了解」

十機のザクが散開し、暗礁地帯に侵入して搜索を開始する。隊長は暗礁地帯右側を岩をすり抜けながら搜索していた。それから数分後、隊長機の通信機が反応しオープン回線で部下から通信が入る。

「マゼラン級一隻を発見しました。指示を求めます」

「分かった。全機、聞こえていたな。ただちに集合し、仕掛けるぞ」

隊長機は不敵な笑みを浮かべ、部下が示した座標に向かってブースターをふかしながら飛んでいく。

マゼラン・艦橋

マゼラン級の艦橋ではラグスたちからの報告を待っていた。その時、レーダーが高速で近づく物体を捉える。

「右舷二時の方向から高速で近づく物体多数確認！」

「ちつ、予想よりも早いな。二機を発進させて対応させろ」

通信使が頷き、通信をオンにする。

「シューリスさん、サクリスさんはただちに発進願います。」

「了解しました。」

「二機が発進次第、マゼランは反転し単装砲ならびにミサイルで応戦しながら撤退を開始する」

「二機の発進を確認」

「反転百八十度、単装砲ならびにミサイルランチャー発射用意」

前方向を向いていた単装砲とミサイルランチャーが後ろ向きに回転し、まとまっているザクたちに向かって砲門を向ける。

「照準固定、発射準備完了。撃ちますか？」

「ああ、ただ二機の邪魔にはならないように注意してくれ」

「了解」

艦長の指示から数秒後、ビームとミサイルが放たれザクに向かって飛んでいく。

「二つともそのまま撃ち続ける。これより本艦は第二合流地点に向かい、そこで四機が帰還するまで待機する。最大船速に移行せよ」

マゼランは速度を上げ、戦闘宙域から離脱を始める。

「サクリス、そっちの五機は任せたぞ」

「分かった」

二機は二手に別れシュौरリスは左の五機を、サクリスが右の五機を相手に戦い始める。

シュौरリスは右手に持っているビームスプレーガンで一番近くにいたザクのコックピットを撃ち抜き、それと同時にブースターを吹かして残った四機に向かって突撃していく。

一方のサクリスはガーディアン・シールドを使ってザクマシンガンを防ぎ、反対にシールドに内蔵されているガトリングでザクを返り討ちにする。それを繰り返して二機を撃破するが、残ったうちの二機がヒート・ホークを持って突っ込んでくる。ザクから放たれた一撃をシールドでいなし、右腕に装備されているビームダガーをそのまま展開してコックピットを突き立てる。

暗礁地帯・外縁

ラグスはまず一番手前にいるザクのコックピットに向かってビームを放ち、その後右腕のビームサーベルを起動し近くにいたザクを横一線に切り払う。その時、ケンから通信が入る。

「隊長、なんか妙ですよ。反撃が全然優しすぎます」

「そうか！ ケン、こいつらは囷だ！ マゼラン級が危ない。戻るぞ！」

「はい！」

二機はブースターを最大限吹かして、来た道に戻っていく。暗礁地帯の中をしばらく進んでいくと、戦闘の光と思われるものが見えてくる。

「あれだな。いくぞ」

ラグスはシューリスを背後から狙っていたザクに向かってビームスプレーガンを二発撃つ。放たれたビームは真っ直ぐ飛んでいき、ザクの左足と頭を貫く。その後ザクは爆発し破片を周辺にばらまく。ケンもサクリスの近くでヒート・ホークを振りかぶっていたザクに向かってロケット砲を放ち撃破する。

「大丈夫か、お前ら！」

「ありがとうございます。隊長！」

「すごいですね、二人だけで八機もやるなんて」

「いや、ただ隊長やケンが来てくれなかったら俺たちは死んでいた。ありがとう」

「とりあえず詳しい話はマゼランに戻ってからにしよう」

「そうですね。帰りますか」

戦闘を終えた四機はあらかじめ設定していた合流地点に向けて移動していった。

第十四話

「もうすぐルナツーに到着しますね」

「ルナツーを出発してから一週間ぐらいしか経っていないが、なんか懐かしい感じがするな」

暗礁地帯での戦いから二日、ラグスたちはルナツー付近まで戻ってきていた。

ルナツー内・司令室

ルナツーではソロモン攻略についての最終会議が終わり、レビルとティアンムだけが部屋に残っていた。

「それでティアンム君、お願いとはなんだね？」

「その件なんです、第十五機械化遊撃小隊をお借りしてもよろしいでしょうか？」

「まあいいだろう。一応理由を聞いてもいいかね？」

「はい。ソーラ・システムの準備に第三艦隊に配備されているモバイルスーツ隊以外のほぼ全部のモバイルスーツが回ります。そのため付近の防衛は手薄になってしまいます。彼らにはその際の護衛をお願いしたいのです」

「そうか。理由は分かった。彼らに話しておく」

「ありがとうございます。では失礼します」

ティアンムはレビルを残して部屋を後にした。

ラグスはルナツーに帰投後、一番にレビル将軍に呼ばれたため司令室に来ていた。

「君たち、ご苦労様だった。今頃ソロモンでは補給が届かず大変な思

いをしているだろう。もうすぐソロモン攻略が始まる。その前に君たちには三日間の休暇を与える。ゆっくりと休みたまえ。その後、ティアンム君の艦隊の護衛に就いてもらう。よろしいかな?」

「休暇のご配慮感謝致します。護衛の件は承知いたしました」

「時期に大きな作戦が始まる。今はゆっくりと休んでくれ」

「ありがとうございます。では失礼します」

ラグスは一礼し、部屋を出る。

「ラグス中佐!」

ルナツーにある士官室に向かう途中、後ろから声を掛けられラグスは振り返る。

「あなたは?」

「申し遅れました。私は第四百四十二MS 部隊隊長のアルス中佐であります。ラグス中佐の部隊のお噂は色々な所で聞いておりました」

「そうか。君たちの部隊がレビル艦隊の直轄部隊か。あと同じ階級だから敬語は止めてくれないか?」

「それはラグス中佐も同じじゃないですか。あと、言葉使いについては許してください」

「それで用件は?」

「ラグスさんたちのお噂は色々な所で聞いておりました。それで、ソロモン攻略が始まるまでに模擬戦をお願いしたいのです。うちの部隊は、余り実戦経験がなく、ラグスさんたちのお相手をする事で少しは経験を積めるかと思っております」

「そうか、事情は分かった。模擬戦は明後日の午前十時でいいか?」

「はい。ありがとうございます」

「準備もあるだろうから、先にルールを決めよう。モビルスーツは公平をきすため、全員ジムで行う。武器はそれぞれ自由だ。そちらの人数に合わせて、こちらも三人で戦う。それでいいか?」

「はい。それで大丈夫です」

「じゃあ、また後でな」

ラグスは、アルスと別れて部屋に戻る。

ルナツ・士官室

「皆、聞いてくれ。二日後に第四百十二MS 部隊と模擬戦をするこ
とになった」

「第四百十二MS 部隊……ああ、レビル艦隊直轄の部隊ですね」

「そうだ。三対三でモビルスーツはジム、武器は自由。」

先に全員撃破した方が勝ちだ」

「分かりました」

「皆、準備しといてくれ。以上、今日は解散だ」

二日後 ルナツ・外部演習場

「それでは模擬戦を始めるぞ。三対三の試合でいいな。ビームは最低
出力、実弾はペイント弾だ。では二手に別れて開始する」

「分かりました」

六機は二方向に別れて定位置につく。

第十五機械化遊撃小隊からはラグス、シューリス、ケンが、第四百
十二MS 小隊からはアルスと部下二人が参加している。使用する
モビルスーツは公平に普通のジムで、武器に関しては全員ばらばらで
ある。

「それでは、始めー」

模擬戦が開始されてからまず突撃したのは、アルスの部下の一人
だった。右手に持っているビームスプレーガンでシューリスを狙う。
半秒後、銃の引き金がかかれビームが放たれる。それをシューリスは
緊急回避でいなし、反撃とばかりにブルパップ・マシンガンの弾をば
らまく。放たれた弾十五発のうち、六発が部下のジムの左腕に当たり
損傷判定を与える。そのままの流れでシューリスは、威力を最低にし
たビームサーベルに持ち換えてブースターで一気に間合いを詰め、相
手のジムの腹を一閃する。真っ二つにされたことでAI が撃墜判
定を出し、相手のジムは後ろに下がっていく。

次に動きをみせたのはケンで、肩に担いだバズーカで敵が潜んでい
ると思われる場所に弾を撃ち込む。その直後、近くの岩に隠れて様子
を伺う。それを繰り返すこと数分、しびれをきらしたのか一機のジム
が飛び出してくる。ケンは待ってましたとばかりに飛び出してきた
ジムのコックピットめがけて腰に装備していたビームスプレーガン
を放つ。銃口から放たれたビームは、まっすぐジムのコックピットを
貫き、こちらも撃墜判定となる。

残るはアルスの一機のみとなったが、アルスは冷静に岩の後ろに隠
れチャンスをうかがっていた。そして、二人目の部下がやられ、相手
のケンが油断した瞬間岩から飛び出し、持っていたビームスプレーガ
ンでケンのジムを貫く。その直後、ラグスが後ろからバズーカを撃ち
込みアルスも撃墜判定をくらう。

模擬戦終了後、ラグスとアルスはルナツーにある談話室にいた。

「今回は、ありがとうございました。とても勉強になりました」

「いや、こちらこそだ。また頼む」

「明日はいよいよソロモン攻略ですね。頑張ってください」

「ありがとう」

二人は最後に握手をし、次の日から始まる攻略に備えて各自の部屋
に戻っていった。

第十五話

第二連合艦隊の旗艦「タイタン」では作戦についての最終確認が行われていた。

「それでは、ワツケイン少佐率いる第三艦隊にはサイド4の残骸を利便して回収してもらう」

「分かりました」

「そんなに心配するな。モビルスーツ隊は集中して配備させてある。あのホワイトベース隊もいる。大丈夫だ」

「ええ、彼らには期待してますよ」

「作戦開始と共にパプリク隊を突撃させてビーム攪乱幕をばらまき、モビルスーツ隊を送り込む。最低でも十五分以上はジオンの部隊を拘束して欲しい」

「はい。お任せください」

「他の艦隊は全部ソーラ・システムの設置に回ってもらう。太陽光が反射に適した位置まで移動する一時間前を作戦開始時刻として、行動してもらおう」

「分かりました」

「それでは、十分後にルナツーを出る。全員、各艦に戻って準備を始めよう」

「はっ！」

各艦の艦長はティアンム中將に敬礼をして、ブリッジを出ていく。

マゼラン級「アルビナ」

「艦長、お帰りなさい」

「ああ、ただいま。ラグス中佐はどこにいる?」

「いまは、談話室にいますか?」

「ああ、頼む」

数分後、ブリッジのドアが開きラグスが入ってくる。

「艦長、どうした？」

「一応作戦を確認しようと思いましたが」

「そうか。それで、どう決まったんだ？」

「とりあえず、ワッケイン少佐の第三艦隊が囷になってジオンを引き付け、その間に我々がソーラ・システムの展開をするみたいです。ソーラ・システムを照射したあとはソロモンの内部に侵入して行くみたいですね」

「そうか。でも我々はソーラー・システムを展開する部隊の護衛だよな」

「ええ、そうです」

「そうか、分かった。ありがとう。俺たちは格納庫でモビルスーツの最終チェックをしている。なんかあったら呼んでくれ」

「分かりました」

ラグスはブリッジを出ていく。

「よし、エンジン始動。艦隊の発進に合わせ、本艦も出撃する」

数分後、第二連合艦隊はソロモンに向けて発進していった。

ソロモン————ソロモンとは、元々アステロイドベルトから運ばれてきた資源採掘用の小惑星である。それをジオンが一年戦争前に軍事用に改装し宇宙要塞となった。ア・バオア・クー、グラナダとならびジオン本土を守る重要な拠点で、司令官を務めるのはドズル・ザビ中将で、宇宙攻撃軍の本部である。————

ソロモンの司令室ではドズルとラッコクがモニターを前にして話をしていた。

「それで、連邦軍の予想進路は？」

「はっ、サイド4方向より進軍しつつあるようです」

「そうか。あの運ばれてきたモビルアーマーはどうなった？」

「ギレン閣下から送られてきたモビルアーマーは組み立てを開始しましたが、決戦までに間に合うかどうかというところですよ」

「そうか、ギレン兄もキシリアも戦いは数だということを全く分かってくれん。せめて、ガルマがいてくれたら戦況は変わっていたかな」

ラツコクは話ながらコーヒーをいれ始める。

「そうですね。コーヒーが入りましたよ」

「おお、ありがとう。束の間の休息だな。次期にここは戦場となるし、落ち着いてはいられなくなるからな」

「はい」

二日後・サイド1

旗艦「タイタン」

ブリッジでは、オペレーターがソロモンの反対側で交戦が開始されたことをキャッチし、開戦の時を待っていたティアンムに一報を入れる。

「作戦開始されました。第三艦隊が交戦を開始した模様です」

「そうか。これより、ミラーの設置を開始する。全機作業に掛かれ」

その指示を聞き、ブリッジから見える窓の外ではジムやボールがコロンプス級からミラーを取りだし設置を開始している。

マゼラン級・「アルビナ」

アルビナ付近では、しきりにジムやボールが往復をしてミラーを運んでいる。シユーリスたちはそれをしばらく眺めていたが、ラグスカ

ら話しかけられ振り返る。

「ミラーの展開が始まったな。俺らも出撃して付近の警戒に当たるぞ」

「分かりました」

四人は格納庫に向かって進んでいきパイロットスーツを

着用し、格納庫を出てソーラ・システムのコントロールを行う「タイタン」を中心として付近の警戒任務に着く。

展開開始から三十分たち、ミラーの展開が80%ほど終わった頃第三艦隊から「タイタン」に緊急通信が入る。

「ジオン艦隊の一部が転進し、そちらに向かっていった模様。注意されたし。」

それを聞いたティアンムは部下に指示を出す。

「そうか。ワッケイン、よく耐えてくれた。パプリクを出撃させ、ビーム攪乱幕を散布しろ」

「了解」

それからすぐに後方に待機していた二隻のコロンブス級から十機のパプリクが出撃して、ミラーの周辺に攪乱幕が入っているミサイルをばらまいていく。

さらに数分後、タイタンのレーダーが端にジオンの艦隊を捉え始めた頃、ミラーの展開が完了する。ブリッジでは、オペレーター二人がティアンムに状況を伝える。

「ミラーの展開完了。太陽が最適位置まで来るまで残り、一分」

「接近しているジオン艦隊が、砲撃を開始しました。また、ソロモンからも大型ミサイルが発射されました」

タイタンのレーダーの端にいくつもの光点が現れ、こちらに向かってきている様子をティアンムは確認し、一蹴する。

「気にするな。ミラーの微調整をする。照射目標、ソロモン第六ゲート」

「微調整、左5度。照射開始まで、五、四、三、二、一、照射開始」
カウントダウンがゼロになると同時にミラーに太陽光が当たり始め、数秒後には戦場全体がまばゆい光に包まれていく。ソロモンの表面は赤く溶け、ソロモンのゲートから発進しようとしていたザクは高温の熱で下半身を溶かされ、上半身だけが床に転がる。同じく発進準備をしていたチベ級も高温の熱で装甲を溶かされ、四散していく。このような光景が、サイド1方向の他のゲートでも繰り広げられあつという間に各ゲートは地獄絵図となる。

ソーラ・システムの光をコックピットから見ていたラグスは思わず
眩く。
「ソロモンが、焼かれていく」

第十六話

ソーラ・シシステムの光は焦点をずらし、ソロモン全体をえぐるように照射されていった。ティアンムはそれを確認し、通信機に手を伸ばす。

「全艦及びモビルスーツに通達。ソロモンは、要塞設備と守備艦隊に大きな被害を被った。攻めるのは今しかない。全艦ミラーの前に出て、こちらに向かいつつある敵の主力を叩け。手の空いているモビルスーツは、ソロモンにむけ突撃に掛かれ」

ティアンムの通信と共にそれまでミラーの後方で待機していた第三艦隊以外の艦艇達が一斉にミラーの前に躍り出て、こちらに向かって砲撃を始めているグワジン級やムサイ級に主砲の照準を合わせる。数秒後には、無数の砲撃が開始され、一番前方を航行していたムサイ級二隻がマゼランやサラミスの集中砲火を受けて轟沈する。隊列が乱れた隙間をジムやボールが進んでいき、艦の側面から攻撃を加え始める。

一方のモビルスーツ隊は、一部が敵艦隊を叩くために抜けていき、残った部隊たちは敵艦隊を迂回しながらソロモンの表面を目指していた。反対側の第三艦隊のモビルスーツはもうソロモンの表面に取りつきつつありソロモンの防衛線が崩れるのも時間の問題だった。

ジム・スナイパーカスタム内コックピット

ラグスは、ミラーの影に隠れ照準にムサイ級の艦橋を入れる。そしてR―4スナイパーライフルの引き金を引いた。銃口から一筋のビームが放たれ、真っ直ぐに真空の宇宙を進んでいく。数秒後には、ムサイの艦橋を綺麗に貫き爆発させる。その直後、コックピット内の通信機がなり、「アルビナ」のオペレーターから通信が入る。

「ティアンム中将より通達が来ました。第十五機械化遊撃小隊は現時刻を持って艦隊防衛の任を離れ、要塞内部の制圧任務に着いて欲し

いということですよ。」

「そうか、分かった。テイアナム中將に了解しましたと伝えておいてくれ」

「はい。」

ラグスはチャンネルを切り替え、シューリスたちに通信を繋げる。

「皆、聞こえているか？ たった今任務が変わった。これより、俺たちはソロモン内部に向かう」

「それは本当ですか？」

「ああ、本当だ」

「分かりました。とりあえずそちらに向かいます」

シューリスたち三人はそれぞれバラバラに散らばり護衛をしていたが、数分後には全員がラグスのもとに集結し四機でソロモンへと向かい始める。

数十分後、ソロモン内部

「そー！」

シューリスが放ったビームは飛び出してきたザクのコックピットを貫き四散させる。

「全く、まだ内部には敵が多いですね」

「そうだな。……お前ら、止まれ！」

「どうしました？」

「なにか来るぞ！」

ラグスが素晴らしい放った直後、奥の通路から一機のリック・ドムが出てくる。武装は普通のジャイアント・バズだが、リック・ドム本体のカラーが緑と青のツートンカラーになっていた。

「色付き、エースだ。シューリスたちは下がれ。俺でも何分持つかわからない」

「で、でも……分かりました」

最初は反対しようとしたシュールリスたちだったが、諦めたのか来た通路を戻っていく。その光景を見て、リック・ドムのパイロットはオープン回線で話し出す。

「瞬時に戦力を判断し、部下を戻らせた事は良し。しかしジオンの栄光のため、貴様らには塵となってもらう。」

「俺にも部下たちを守るといふ隊長としての義務がある。簡単に負けるわけにはいかない」

「部下を想う心だけは一人前のようなだな。存分に相手してやろう。私の名はアナベル・ガトー。」

「俺はグラディ・ラグス。第十五機械化遊撃小隊の隊長だ」

「では参るぞ。」

ガトーはそう言い放つと右手に持っているジャイアント・バズの銃口をこちらに向けてロケット弾を放つ。ラグスは頭部のバルカンを発射し、向かってきている弾を破壊する。辺りは爆発の煙に包まれるが、ガトーは煙を利用してラグスのジムに近づきヒートサーベルを横に一閃する。

「くそっ！」

左手を犠牲にしてなんとか攻撃をかわし、右手のビームスプレーガンでドムのコックピットを狙う。しかしビームが届く直前でバレルロールされてしまい、そのままビームは壁に吸い込まれていく。さらにラグスは反撃の隙を与えてはいけないと右手のビームサーベルを持たずに展開し、ガトーのドムに斬りかかる。

「甘い！」

ガトーは下から切り上げるようにヒートサーベルを動かし、ラグスのビームサーベルを弾く。切り上げた勢いを利用してサーベルを振り下ろしジムの右足を切り落とす。

「これで終わりだ！ ……なに？ ドズル閣下が出撃するだど？ ……すぐに行く。それまでお止めしておけ！」

オープン回線を切り忘れたのかガトーはラグスに聞こえていることも知らずに部下との通信を終わらせて、踵を返して通路の向こう側へと消えていった。

「……助かったのか？」

ラグスは戦場であることも忘れて思わずシートに寄りかかってしまう。しかし不意に通信機がなり、ラグスは目を開ける。

「隊長、大丈夫ですか！」

ラグスが振り向くと、そこにはシューリスたちが戻ってきていた。

「お前らなぜ戻ってきたんだ！」

「どうしても隊長が心配でいても経ってもいられなくなっただんですよ」

「そうか。ありがとう」

「さあ、アルビナに戻りましょう」

「そうだな」

ラグスのジムはシューリスとケンに支えられながら通路を抜け、宇宙空間に出る。その時、

「ぼ、化け物だ！」

「誰か、助けてくれ！」

「うわーやめろ！」

いきなりオープン回線で聞こえてくる声にラグスたちは恐怖を感じた。

第十七話

「なんだよ、あれは！」

シューリスたちが見つめる先、ソロモンの表面に二足歩行の大きな物体が姿を現していた。その物体はゆっくりと浮き上がり第二連合艦隊の元に向かって進んでいく。

ラグスはその意図を察し、シューリスに指示を出す。

「お前ら、よく聞け。あれが向かった先にはティアンム提督の乗るタイタンがある。俺のことはいい。はやく護衛に行け」

「でも……分かりました」

シューリスたち三機はブースターを吹かし、第二連合艦隊の本体がいる宙域に向かっていく。

マゼラン級・タイタン

「ソロモンからア・バオア・クーに脱出すると思われる艦隊を発見。どうしますか？」

「ソーラ・システムの再照射を行う。目標、脱出する敵艦隊！」

「準備よし！」

「照射開始せよ！」

ソーラ・システムのパネルは先ほどの照射後の戦闘で約一割が失われたがそれでも威力をほぼ落とすことなく第二射目を迎えた。再び照射された高熱の光は実に半分以上の敵艦隊を葬り去ることに成功する。その時、レーダーが新たな敵を捉える。

「前方から大型MA 接近中！ すでに近くにいたサラミス二隻が大型メガ粒子砲の直撃を受け爆散。さらに迎撃しようとしたモビルスーツ隊も大きな被害を受けています」

「くっ、全艦射撃用意。発射！」

隊列を組んでいるマゼランやサラミスから断続的にビームが放た

れる。しかし、敵へと届く直前にフィールドに弾かれてしまう。

「モビルスーツ隊に通達！ なんとしてもあれを食い止めろ！」

「了解。モビルスーツ隊は直ちにあの大型MA を食い止めてくれ、繰り返すモビルスーツ隊は……………」

艦隊の付近にいたモビルスーツはそのほとんどがビグ・ザムの撃破に向けて動き出した。しかし、数分後には向かっていったすべてのモビルスーツ隊が壊滅してしまう。

「敵MA と戦っていたモビルスーツ隊壊滅！ MA はこちらに向かってきます！ あつ、大型メガ粒子砲の発射を確認、サラミス級一隻爆散！ さらにこちらに向かってきます」

ティアンムは覚悟を決め、更なる射撃を命じる。

「全艦突撃！ なんとしてもあれを沈めろ」

雨のような射撃がビグ・ザムに向かって放たれる。しかしビグ・ザムはいとも簡単に弾き返し無数のメガ粒子砲を放ち一気に十隻以上の連邦軍艦艇を葬り去る。そして大型メガ粒子砲がタイタンに向けられたその時、——レビル将軍、後は頼みましたぞ！ ——、ティアンムは心のなかでそう叫びながら爆発のなかに消えていった。

ジム・インターセプトカスタム内コックピット

シューリスは、目の前で爆散していったタイタンを見てモニターを叩き唇を噛み締めた。

「くそ、間に合わなかった！」

タイタンを撃破したビグ・ザムは新たな獲物に向かってい飛行していく。シューリスの頭の中では心の奥底に封印したはずの家族がジオンにやられる瞬間がフラッシュバックし、なにかが切れる音がした。

「…………ジオンが調子に乗りやがって、絶対に落としてやる！ 地獄におちやがれ！」

シューリスはブースターを吹かし、ビグ・ザムを追いかけ始める。

「シューリス、待て！ 先走るな…………」

サクリスから通信が来るが、シューリスはすぐに切って進み続ける。

「よくもティアンム提督を！ 化け物め落ちろ！」

右手のビームスプレーガンを三発連続で放つ。しかし、すべてIフィールドに防がれる。腰部のビームサーベルを引き抜き斬りかかろうとするが、ビッグ・ザムから多数のビームが一度に放たれ、ジムの脚が膝下から吹き飛ばされる。さらに膝裏のブースターにビームが直撃したことによる爆発で後ろに大きく吹き飛ばされる。それをサクリスとケンが受けとめ、接触回線で呼び掛けられる。

「だから言ったろ、先走るなって」

「でも、あいつがティアンム提督を殺りやがったんだ。なんとしても、ああ！」

シューリスが叫び、サクリスが顔を上げるとそこにはビッグ・ザムに向かって突っ込んでいく一機の戦闘機の姿が有った。その戦闘機はコックピットを潰されながらもビッグ・ザムに特攻し爆発する。その後、ホワイトベース隊のガンダムが最後の一撃を与えビッグ・ザムは爆発し散っていった。

それから少ししてソロモンは連邦によって陥落し多くの部隊が敗走していった。連邦は追撃を行ったがラグスの戦った相手——アナベル・ガトー——によって壊滅し彼はソロモンの悪夢と呼ばれるようになる。

数時間後・ソロモン内部

ソロモンはコンペイ島と名前を改められ、各艦隊が集まっていた。先のチェンバロ作戦によって連邦軍は実に半分の宇宙艦隊を喪失しモビルスーツ隊も半分近くが未帰還となった。そのため第一連合艦隊と第二連合艦隊を解体して三つの大隊に分けた。コンペイ島では施設復旧が進められ中破や小破の艦艇やモビルスーツが修理を受けていた。そんな中、第十五機械化遊撃小隊も整備を受けておりラグスたちは通信でレビル將軍に呼ばれ臨時の司令部に来ていた。

「この度はティアンム提督をお守りすることが出来ず申し訳ありませんでした」

「いや君たちのせいではない。戦場に死はつきものだ。それにあのM A にはドズル・ザビが乗っていたらしい。仕方ないだろう」

「そう言っていたけると助かります」

「それと君たちのモビルスーツは修理と共に武装の強化も行う。星一号作戦でも期待しておるぞ」

「はっ！ 今度こそ閣下のお役に立たせていただきます。それでは失礼します」

ラグスたちは画面の中のレベルに敬礼し、部屋を出ていく。

第十八話

コンペイ島・臨時修理場

「それにしても派手にやられたな。修理には時間がかかるぞ」

ライダースの前には左腕と両足を失ったジム・スナイパーカスタムと両足を膝下から失ったジム・インターセプトカスタムが置かれていた。

「……すみません」

「まあ、技術者の腕が鳴るってもんさ。ただ、星一号作戦に間に合うかは分からんな」

「そうですね。まあ仕方ないです。ではお願いします」

「ああ、任せてくれ」

ラクスは修理場を後にしてシュールリスたちと合流するためにコンペイ島内の臨時士官室へと向かっていく。

コンペイ島内・臨時士官室

「隊長、ホワイトベース隊のガンダムのパイロット見ました？ まだ二十歳もいかない子供ですよ。あんな子供がモビルスーツに乗ってジオンのモビルスーツを倒すなんて世も末ですね」

「そうだな。それにしても、「アルビナ」もひどくやられたな。もう俺の来たときには中破だった」

ソーラ・システム宙域にいたフェーベはジオン急襲部隊の攻撃を受け、中破していた。

「それにしてもジムがあんな状態でよくドム四機を倒せましたね」

「いや実は俺もよく覚えてないんだ。遠くからアルビナが攻撃を受けていることまでは分かったんだがな」

「もしかして今噂されているニュータイプってやつじゃないですか？

ガンダムのパイロットもニュータイプって噂ですよ。じゃなきゃ三分でリック・ドムをあんなに撃破できないですからね」

「あれを聞いたときは俺もビックリしたよ。しかし、俺はニュータイプじゃない」

話すタイミングを図っていたように今までは二人の話を聞いて黙っていただけのサクリスが突然口を開く。

「エースでもないのに敵M A へと突っ込んでいったバカは絶対にニュータイプじゃないな」

「おいサクリス！ それは言うなよ」

シューリスがすぐに反論をするが、便乗するようにラグスも続ける。

「そうだな。敵わない敵にまっすぐ突っ込んでいくやつは絶対にニュータイプではないな」

「隊長まで！ ひどいつすよ！」

その後三十分ほど四人で話し込み、ラグスたちはコンペイ島内に用意された寝室に向かっていった。

数時間後

ラグスはけたましく鳴る警報の音で目を覚ます。部屋から出て付近の様子を確認し、たまたま近くを通りかかった別の隊の少尉に事情を聞く。

「すまんが、なにがあつたか教えてもらつていいかな」

「はい。何でも完全に撤退したと思われていたソロモン艦隊の一部が暗礁地帯に身を隠し、こちらの気の緩んだ隙について攻撃を仕掛けてきたんです。確か貴官らの部隊にも出撃命令が出たはずですよ」

「そうか、ありがとう」

少尉は通路を通って格納庫の方へと消えていった。それと同時に近くの部屋からシューリスたち三人が出てくる。

「隊長！ どうしたんすか。」

「ジオンの襲撃だ。俺たちも出るぞ」

「機体はどうするんですか？」

「わからんがとりあえず俺たちも格納庫に行こう」

ラグスたち四人は格納庫に向かって走っていった。

臨時格納庫

格納庫内は突然の襲撃により大混乱となっていた。そんな中でも冷静な者からモビルスーツに搭乗し出撃していく。

「ライダーさん！」

「おお、ラグスたちか。確か君らにも出撃命令が出ていたな。ラグス、シューリス、サクリスのモビルスーツはまだ整備が完了していない。ルナツから持ち込まれたジムコマンドで出撃してくれ。ケンのジム・キャノンが武装の追加だけだったから終わってるぞ。まあ、訓練する時間がないが頑張ってくれ」

「はい！」

全員がモビルスーツに乗り込み、ソロモン内部から外に出た。すでに戦闘は始まっておりあちこちで輝く光が見えている。

「オペレーター、敵の戦力は？」

「ええつと……、チベ級二、ムサイ級五、ドム十五機、ザク二十機です」

「戦場を見るとこちらの数が少ないように見えるが？」

「ええ、残った第二艦隊の半数以上が小さくない損害を受け、修理中で動けません。さらに第一艦隊はまだ、ソロモンに向け航行中の部隊もあるのです。でも第百四十二MS 部隊など数少ない第一艦隊所属のモビルスーツ隊が善戦しています」

「そうか、分かった。お前ら、行くぞー！」

「了解」

四機はブースターを吹かし、戦場へと進んでいく。

「おらよー！」

ラグスは右手に構えたビーム・ガンを向かってくるザクに向かって放つ。さらにその後方にいたドムに向かって二撃目を放つがこれは

避けられてしまう。

「なかなかの手練れだな」

ラグスはビームサーベルに持ちかえドムに急接近し、上半身を袈裟斬りにする。爆発する直前に胸部を蹴り、勢いをつけて次の目標へと移る。

「当たれ！」

ケンは新しく支給されたバルザック式360mmロケット・バズーカをこちらに向かつて厚い弾幕を張っているムサイの艦橋に向かつて放つ。放たれた大口径のロケット弾は、見事に直撃しムサイは誘爆で四散した。二隻並んで航行していた内のもう一隻覚悟を決めたのか回頭し、こちらに突っ込んでくる。ケンは腰に新しく装備されたビームサーベルを引き抜き、ムサイとすれ違い様に一閃する。二つに別れたムサイは数秒後に四散した。

「接近戦も行けるかもな」

その後、ケンはザク二機、ドム三機を撃破するという戦果を上げる。数十分後には、ジオンの部隊は全滅しソロモンには平和が戻った。

第十九話

小規模戦闘から一日、コンペイ島宙域では係留されていたマゼラン級やサラミス級が突然爆発する不可解な現象が多発した。駐留していた連邦軍の軍人からはソロモンの亡霊と呼ばれ恐れられた。ソロモンの亡霊はラグスたちが調査する前にホワイトベース隊によって撃破されたが、ラグスはなんとなく悪寒と頭痛を感じ一回だけだが艦艇の爆発を予測し、それが的中したことにより怪訝に思われてしまっていた。

「隊長、さつきはどうしたんですか？」

「頭の中に飛び込んできたから思わず眩いたらすごい変な目で見られたよな。でも俺は悪くない」

「全く、いきなりマゼラン級が危ないとか言い出したと思ったら外ではマゼラン級が本当に爆発するしで内部は大騒ぎだったんですから」

「それにしても、ジオンが戦闘にニュータイプを投入してくるとは俺も思わなかった」

「とりあえず連邦で確認できているニュータイプはアムロ・レイだけですよね」

「そうだな。連邦にも他にニュータイプがいるといいんだがな」

「まあそんな簡単には見つからないですからね」

ラグスとシューリスはその後会話も続け一時間後には就寝した。

次の日には第一艦隊の主力がコンペイ島に入港し、本格的にア・バオア・クー攻略戦の準備が始まった。ラグスたちのモビルスーツは四機中二機の改修が完了し、あとはシューリスのジム・インターセプトカスタムとサクリスのジム・ガードカスタムだけである。しかし、シューリスの機体は足の整備が完了しておらず、サクリスの機体はバックパックの改修が進んでいない。さらに母艦である「アルビナ」もまだ小破状態である。これは、エンジンブロックに被害が及んでい

たことにより慎重に作業が行われていたからである。

一方、ラグスはまたもやレベルに呼ばれ司令部に来ていた。

「毎回呼び出してしまつて申し訳ないな」

「いえいえ、今回はどのようなご用件で？」

「ああ、君たちには別々にモビルスーツ隊を指揮してもらいたいんだ」

「それは……」

「何分ソロモン攻略戦で隊長クラスの人材が半減してしまつてね。君たちの能力からしても十分勤まるはずだ。お願い出きるかね？」

「……分かりました。お引き受けします」

「そうか、それは良かった。他のところでも多くの戦果を挙げた部隊は解体し、若手部隊のまとめ役として着任させている。君たちにも出来るはずだ。所属については第二大隊所属となる。いつも済まないな。よろしく頼んだぞ」

「……レベル將軍、すまないんですが多分モビルスーツの整備と母艦の修理が間に合いません。少し遅れそうです」

「その点については了承済みだ。焦らなくていい」

「分かりました」

「一時間後に第二格納庫に部下となる兵たちを集める。時間までには行つてくれよ」

「はっ！」

ラグスは敬礼をして、部屋を出る。

一時間後・第二格納庫

格納庫には総勢二十四名の兵士たちが集まっていた。

「全員、揃つたな。俺は、第十五機械化遊撃小隊隊長のグラディ・ラグス、階級は中佐だ」

見た目から左官と思つていなかったのか中佐と聞いた瞬間、全員が敬礼を行い姿勢を正す。

「もうすぐ星一号作戦が開始される。しかし、我々はソロモン攻略戦で多くの仲間を失つてしまった。部隊は激減し、戦力は少なくなつて

いる。さらに指揮官も不足し、部隊の統制は取れていない。そこで、レビル将軍が提案なされたのが戦果を多く挙げた部隊を解散し、指揮官が不足した部隊に部隊長として編入することだ。俺たちもそのよ
うな理由で貴官らの部隊に入ることになった。割り振りとしては、俺
が第三十六小隊と第五十六小隊、そこにいるシューリスが第二十六小
隊と第六十小隊、サクリスが第百十一小隊と第六十二部隊、ケンが第
三十三狙撃部隊と第六支援部隊を持つ。これからの指示は彼らに聞
いてくれ」

ラグスから紹介されると、シューリスたちは前に出て一言ずつ挨拶
をして割り振られた部隊の隊員を呼ぶ。数分で話は終わり、部隊の統
率をとるためにシユミレーションで訓練を始める。

三日後、レビル将軍率いる三つの大隊がソロモンから発進し星一号
作戦が開始された。しかし、ラグスはなんとなく嫌な予感を感じてい
た。

第二十話

三つの大隊の発進から三十分遅れ、「アルビナ」はコンペイ島を出発した。本来なら先に出発した大隊に追いつくことは出来ないはずだが、加速ブースターをつけることにより一時間後には合流できる予定だ。ラグスたちは最後の決戦に備え、仮眠を取っている。

一時間後、無事に第二大隊と合流しブースターを切り離れた「アルビナ」の艦内ではラグスが悪寒と頭痛に襲われ目を覚ましていた。「なんだ、この感覚は？」

ラグスの眩きでシュウリスが目を覚まし、寝ぼけた目でラグスを見つめる。

「……どうしました？」

「すごく嫌な感じがする。まるでこれ以上進んではいけないような……。ちよつとブリッジを見てくる。まだ寝てていいぞ」

「分かりました」

ラグスはベッドから起き上がり、左官用の軍服を羽織って部屋を出る。

「ラグス中佐、どうされました？」

「いや、眠れなくてな。あとどのくらいでア・バオア・クーだ？」

「そうですね。あと八時間つてところですね。ただ、妙に第一大隊が突出してるんですよ」

「何か考えがあるのか？」

「さあ、分かりませんが」

「すまなかつたな。うっ」

ラグスは突然の強い頭痛に思わず床に膝を着く。

「大丈夫ですか？」

「ダメだ、これ以上進んではいけない！ これ以上進んだら……」

その時、不意に窓の外を一筋の光が通りすぎていく。

「大変です！ 第一大隊の信号、大多数が途絶しました！」
「なんだと？ すぐに状況を確認する。旗艦に通信を繋げ！」

旗艦と通信を繋ぎ、状況を聞いたアレク少佐は絶句する。

「レビル閣下が戦死された上に第一大隊は八割を喪失か。……苦しいな」

不意に頭を襲った痛みが治まりやつとの思いでラグスは顔を上げる。

「……それで、このまま作戦は続行するのか？」

「そうみたいですね。編成し直して、そのまま戦いに臨みたいですよ」
「分かった。俺は一度ベッドに戻るから詳細が決まったら教えてくれ」

ラグスはブリッジを出て、仮眠室へと戻っていく。

数時間後

第一大隊の残存部隊の配置転換が完了し、再度侵攻が開始された。ラグスたちもいつでも発進出来るように、コックピットで待機している。

「隊長、アルスさんたちが死んだなんて今も信じられませんよ。関わったのは少しですが良い人だったはずですよ」

「そうだな。必ずア・バオア・クーでも活躍してくれるはずだったんだがな。それと一番の問題は、レビル閣下とティアンム閣下を両方とも失ってしまったということだ。彼らがいなくなったら今、連邦は必ず腐敗する。俺たちは失ってはいけない存在を失ってしまった」

「そうですね。彼らはカリスマ性を持っていました。故に連邦軍を率いてこれたんですよ。こう言うてはなんですけど、ジャブローに残っている高官さんたちは誰もが私利私欲のために動いています。この戦争が終わっても必ず次の戦争が起こりますね」

「ああ、俺たちはどうなるんだろうな」

その時、コックピット内の通信機が鳴り、ブリッジから通信が入る。

「ラグス中佐、すぐにブリッジに来てください。」

「分かった」

ラグスはコックピットを出て、通路を進んでいく。

「少佐、どうした？」

「今、本隊から通信があつたのですが我々の部隊を中心にして数十隻でWフィールドで数十分陽動を行つてほしいそうです。どうしますか？」

「そうだな。多分本隊はEフィールドとSフィールドから攻めるんだろうな。少しでも戦力を割くための陽動か。……分かった。艦隊の指揮はアレク少佐に一任する」

「そうですか。分かりました。それでは本隊に通信を入れます。多分、数分後には艦隊が派遣されてくると思いますが、モビルスーツ隊はラグス中佐に任せますよ」

「ああ、任せてくれ」

「では、コックピットで待機をお願いします」

「了解した」

ブリッジは艦隊指示のためにあわただしくなり、ラグスはコックピットに戻るためブリッジを出た。

数十分後

「作戦開始まで、三、二、一。モビルスーツ、発進してください」

「グラディ・ラグス、ジムスナ出るぞ！」

ラグスは格納庫を蹴り出て、通信機の周波数を独自に設定したチャ

ンネルに合わせる。

「ジム2個小隊、俺に続け！」

他のサラミスから発進したジム・コマンドを六機従えて、前方に展開しているジオンの艦隊に突入していく。

「前方から、ドムが四機来る。焦らずに対処すれば必ず倒せるはずだ」
「分かりました！」

ラグスはそう指示を出し、自分も向かってくるザクを撃破する。
「当たれ！」

その声に振り返ると一機のドムを二機のジムで対処していた。ラグスはその光景に思わず顔をひきつらせるがすぐに真顔に戻り、次のターゲットを探す。周辺はすでに激しい戦場となっており、連邦ジオン関係なくモビルスーツの破片が浮かんでいる。本隊から派遣された艦艇は、マゼランが十八隻、サラミスが二十隻である。そのうちマゼランが九隻、サラミスが十二隻露天でモビルスーツを係留していた。今は全てのモビルスーツが発進し、その数は八十機以上に及ぶ。「最後の戦闘だ。存分に暴れてやるぜ。全機、片っ端から蹴散らしてやれ！」

その言葉と共にラグスはチベ級からなるジオンの艦隊に突っ込んでいった。

第二十一話

ア・バオア・クー Wフィールド

Wフィールドに突入してから二十分が経ち、戦況はジオン側が有利だった。ラグスたちは善戦していたものの敵の援軍到着により徐々に味方は減りつつあった。

そんな中、混成遊撃部隊臨時旗艦である「アルビナ」からWフィールドで戦っている全員に通信が入る。

「主力部隊が他のフィールドより進軍を開始。これより五分継続したのち後退、各自主力部隊へと合流せよ。殿は、我々第十五機械化遊撃小隊が務める。」

「ふつ、言ってくれるじゃないか」

ラグスは一瞬笑みをこぼし、前方から来るチベ級の艦橋にバズーカの照準を合わせる。一秒後には引き金を引いて弾を発射し、すぐにその場を離れる。後方ではチベ級が爆発し、破片を撒き散らしていく。その時、後方からジムコマンド六機が接近、ラグスに通信を入れる。「ラグス中佐、私たちも殿を務めさせてください！」

「いや、お前たちにそんな危ない真似はさせられない。三分後に後退しろ」

「嫌です。俺たちも残ります！」

「はあ、分かった。だが危なくなったら先に戻れ。それが条件だ」

「ありがとうございます！ 各員聞こえていたな、気合いを入れて臨めよー！」

「弾薬も底をつき始めている。殿を務める前に全員補給に向かえ」

ラグスは六人に指示を出し、自らも補給のため母艦に向かっていった。

数分後補給を終え、ラグスが再び格納庫を出るとシユーリスたちもアルビナの近くに集結していた。その周りには彼らが指揮をしてい

た部隊たちの姿もあり、どこもみんな同じだなとラグスは思った。

「五分経過。各自、後退を開始せよ。」

その通信と同時に後続していた艦艇たちが回頭を開始し、モビルスーツもそれに追従するように反転していく。残存艦艇はマゼラン級十一隻、サラミス級十三隻でモビルスーツはラグスたちが指示している二十八機の他に約四十機が残っている。その集団が一斉に回頭を開始し、他のフィールドを目標して行動を開始した。

「さて、もうひと暴れますか!」

「そうだな。全機、一匹も通すなよ!」

「了解!」

後退する連邦艦隊を追撃するジオンの戦力はチベ級三隻、ムサイ級八隻、モビルスーツ五十機以上からなる大部隊だった。対するこちらはアルビナ一隻にモビルスーツ二十八機、明らかに不利だがラグスたちは勝利を確信していた。ラグスの指示から数秒、漆黒の宇宙をピンクと黄色の筋がいくつも飛び交い始める。

「スナイプ隊は焦らずにチベやムサイを狙ってください。他のジムはスナイプの援護をお願いします」

「了解」

ケンが的確に指示を出し、フェーベの後方に位置しているジムスナイパーII二機は狙撃ライフルを構え、こちらに向かってきているチベの艦橋を照準におさめる。その間に周りを四機のジムコマンドが囲み、狙撃を阻止しようと向かってくるドムやザクを蹴散らしている。そんな刹那、二つのライフルの銃口が火を吹き弾を高速で発射する。弾はきれいな直線軌道を描き、まっすぐチベの艦橋に吸い込まれていった。二隻のチベは航行を停止、チャンスとばかりにアルビナから砲撃が集中し四散する。

ラグスは向かってくるザク三機をビームスプレーガンで撃破し、ブ

リッジに通信を入れる。

「ブリッジ、後退はどのくらい進んだ？」

「60%がWフィールドからの離脱を完了したところです。」

「そうか、艦隊の離脱が80%を越えたらアルビナも後退を開始しろ」

「了解しました。」

エネルギー切れの Sprengung を捨て、両腕に装備されたビームサーベルを手持たず展開させる。ブースターを吹かし前方を航行しているムサイに突撃し、エンジンブロックを下から袈裟斬りにして、そのままの勢いで艦橋に向かってビームサーベルを突き刺し、ムサイを沈黙させた。数秒後には大きなデブリと化したムサイの船体を踏み台に使って、次のムサイへと向かっていく。

数分後、ジオンのモビルスーツは十数機まで減りつつあった。

「こちらサクリス、敵はあらかた片付いた。残ったモビルスーツはア・バオア・クーまで後退していったぞ。」

「なんとかなったか。これより我々も主力部隊に合流する。シユーリスたちの被害は？」

「こちらはジムコマンド二機が中破、サクリスのところは一機が大破です。」

「そうか、シユーリスたちは引き続き指揮を続けてくれ。被弾した機体は母艦に帰還、それ以外は他のフィールドで引き続き戦闘を継続せよ」

「了解。」

アルビナは反転して移動を開始し、ラグスたちモビルスーツ隊もそれに追従するように横を飛行していく。

Nフィールド

数十分後、アルビナ率いる即席遊撃部隊は無事に主力部隊へと合流を果たし、戦線に復帰していた。

「アレク少佐、Nフィールドの状況は？」

モビルスーツの弾薬補充をしている間、ラグスは状況把握のためブリッジに来ていた。

「そうですね。やや、押されていたみたいですが今は押し返しています。五分五分といったところですかね」

「そうか、俺の指揮している部隊はどうなっている？」

「両部隊とも発進準備完了の通信が入っています」

「分かった。ありがとう」

ブリッジを出ていこうとしたとき、オペレーターが振り返る。

「ラグス中佐、格納庫から補給完了の連絡が入りました」

ラグスは頷き、ブリッジを出る。数分後、格納庫を出て他の小隊と合流し戦場に向かっていった。

第二十二話

Nフィールド

「各機、絶対に死ぬな。それが命令だ。生き延びることだけを考えるんだ」

「了解」

ラグスたちは連邦艦隊から離れ、ア・バオア・クーとの中間地点に来ていた。そこでは既にモビルスーツ同士の戦闘が始まっていて、辺りには多数のデブリが浮遊しておりモビルスーツの移動を妨害している。侵攻側にとって不利な状況のなか連邦軍モビルスーツ隊は押されており、アルピナに救援要請が来たのだ。ラグスの機体のモニターから見えるだけでも十機のザクと六機のドムが漆黑の中を自由に飛んでいる。対して連邦はジム二機にボール五機というあまりにも頼りない数だった。そしてラグスの目の前で一機のボールがザクに蹴られ、回りながら四散していった。

「ちっ、味方を援護する。全機、すぐに敵を撃破しろ！」

六機のジムは散開し、敵機の排除を開始する。

ラグスはバックパックのミサイルランチャーからミサイル計三発を発射し、ブースターを吹かして敵機に向かっていく。放たれた三発のミサイルは二機のザクに直撃し、うち一機は爆発、もう一機は足を損傷し撤退していった。ザクの爆発を視界の端に捉えながら右手のスプレーガンを構え、近くにいたドムのコックピットを狙って引き金を引く。ドムは四散するが、ラグスはそれを見届けることなくブースターを吹かし、その場を離れる。直後、ラグスがいた場所をジャイアント・バズの弾が煙を吐きながら通りすぎていく。

「当たれえー」

振り向きざまにスプレーガンを発射し、ドム一機は四散した。しかし一息つく暇もなく、コックピット内にロックオン警報が鳴り響いた。ラグスは焦らずに左手のビームサーベルを展開し、飛んでくるザクマシンガンの弾を避けながらブースターを器用に使い手前にいたザクを袈裟斬りにして、残った奥のザクを左手に持ちかえたスプレー

ガンで撃破する。直後、ジム・コマンドの隊長機から通信が入る。

「ラグス中佐、辺りの敵反応消失しました」

「分かった。弾薬の補充は大丈夫か？」

「全機問題ありません」

「そうか、なら敵反応に注意しつつ前進するぞ」

「了解」

隊長との会話が終わった後、先に戦場で戦っていたジムから通信が入る。

「先程は助けをいただきありがとうございました。第二十五MS小队所属のキャレル中尉であります。」

「中尉ということは君らの隊長は……」

「ええ、僕達を庇って亡くなってしまいました。」

「そうか、俺はグラディ・ラグスだ。君たちは一度後方に戻って補給をしてくれ。弾薬も底をついているだろうからな。ここは引き受ける」

「分かりました。それではお言葉に甘えさせていただきます。」

安堵したような声で話を終え、ジム二機とボール三機は反転し後退していった。

Sフィールド ジム・インターセプトカスタム

「ちっ！」

左腕のビームキャノンを放ち、大きく後ろに後退する。大きな穴の開いた相手のゲルググは爆発し破片を撒き散らした直後、爆煙の中から一筋のビームがシューリスのいた場所を通りすぎていく。シューリスは右手のビームスプレーガンを収束モードで放ち、数秒後爆発を確認する。

「うわー！ 母さん！」

「やめてくれ！ くるなあ！」

Sフィールドではすでにモビルスーツ隊がア・バオア・クー表面に取りつき始めていた。しかし、敵の弾幕も厚く時間が経つごとにこちらの被害は増え続けており、コックピット内の通信機には敵味方問わずパイロットたちの最後の叫びが入って来ている。シユーリスはそれに嫌気がさし、オープン回線のスイッチを切り替え部下に通信を送った。

「これよりア・バオア・クー内部に突入する。全機遅れるなよ！」

「了解！」

シユーリスは目の前に見えるゲートのシャッターをフェロウ・ブスターのミサイルで破壊し、ブスターを吹かす。そしてバックパツクからブスターを切り離しゲート内に侵入、後続のジムたちもシユーリスに続いていく。

「第三六ゲートが突破された！ 至急応援を！」

縦五十メートル、横幅三十メートル程の通路内には警報が鳴り響いており、金属の破片などたくさん物が浮遊している。やけに静かな通路をシユーリス以下五機は静かに進んでいく。そんな最中、突如鳴り響いた警告音は敵からのロックオンを示していた。

「っ！ 後ろか！」

シユーリスは慌ててふりかえるが、時既に遅く敵機はビームを発射、放たれたビームは一番後ろにいたジム・コマンドのコックピットを貫通し四散させる。シユーリスはモニターを通して敵機を捉えるが、敵の肩部にペイントされているマークには見覚えがあった。

「あの蒼いザクの部隊章どこかで……あいつか！」

シユーリスに蒼いザクと呼ばれた機体はさらに続けて何発かビームを発射、部下のジムは次々と被弾し通路の床に落ちていった。

「くそ、よくもあいつらを！」

怒りに身を任せ、ザクに向かってスプレーガンを何発も放つ。しかしザクはそれらをすべて回避し腰部の大型の斧に持ちかえ、斬りかかってくる。その一撃をシユーリスはビームキャノンの小型シールドで受け止め、接触回線で話しかける。

「お前、オデッサの時のやつだな！」

「まだ生きていたか、今度こそ倒してやるぞ！」

第二十三話

数十分前

アルビナ・艦橋

Nフィールドから侵攻している連邦艦艇のうち、「アルビナ」を中心とした約五十隻はモビルスーツ隊にあわせて、本隊よりも突出していた。しかし、モビルスーツ隊がジオンのゲルググやリック・ドム達と艦艇を食い止めており、要塞から離れてることもあつて飛んでくるミサイルを迎撃したり、連邦モビルスーツ隊の合間を突破してきたベテラン乗りのザクを集中砲火で撃破していただけだった。そんな中、一点突破を敢行したジオン艦隊により広く展開していたモビルスーツ隊の一部が瓦解しその穴からジオン艦隊が流れ込んできたのだ。

「モビルスーツ隊、突破されました！ 左舷十時の方向からチベ級二隻、ムサイ級三隻並びに多数のモビルスーツ接近中！」

「火力を左舷に集中、なんとしても食い止めろ！ 接近してきている敵モビルスーツは直衛のジムに任せて、まずは先に五隻の艦艇を撃破する！」

向かってくるチベ級とムサイ級を照準におさめられる主砲四基八門が各々に旋回し、五隻に砲門を向ける。そして、一定の間隔を開けながらメガ粒子砲を発射し始めた。付近のサラミス級や護衛のジムも攻撃を開始し、辺りは桃色の閃光が光り始める。放たれた無数のビームは続けざまに先頭の二隻のムサイに命中、二隻は大爆発を起こし宇宙に破片をばらまいた。そしてムサイが撃沈されるのと同様にチベ級のメガ粒子砲が火を吹き、「アルビナ」の右舷に位置していたサラミスのエンジン部を貫通した。数秒後サラミスは爆発し、衝撃波がアルビナの艦橋を揺らす。

「サラミス級三番艦、轟沈！ チベ級並びにムサイ更に近づく。このままでは衝突コースです！」

「あいつら、特攻する気だな。全艦回避行動、面舵四十！ 砲撃の手は緩めるなよ」

「了解、面舵四十！」

「アルビナ」を含めた四十九隻の艦艇は一斉に回頭を始める。その間にも砲撃は継続され先頭を進んでいたチベ級は集中砲火を浴び、後方を航行していたムサイを巻き込みながら爆発した。続いて、爆炎の中からザクを中心とした約十二機が姿を現し、手持ち武器でジムに攻撃を開始した。チベ級を撃破し油断していたジム二機を容易く落とし、連邦艦隊へと距離を詰めてくる。対するジム大隊は隊長機が指示を出し、一機の敵モビルスーツにつき二機以上で対応し数を武器に次々と敵機を落としていく。

「突撃してきたモビルスーツ隊の壊滅を確認！」

「分かった。残りはチベ級一隻だ、火力を集中させ撃破せよ！」

四十九隻に搭載されているメガ粒子砲がチベ一隻を狙うために旋回し、雨のように砲撃を加え始める。一方、一隻のみとなったチベは最後の抵抗として「アルビナ」に砲門を向け、メガ粒子砲を放った。「くっ！」

操舵手が舵を切り、「アルビナ」はギリギリのところまでメガ粒子砲を回避し、ここぞとばかりに立て続けにチベ級に反撃を開始した。チベ級は圧倒的な火力に耐えられるはずもなく、あえなく爆散した。それを確認したアレクは軍服のボタンを外し、艦長席に背中をもたれた。「ふう、なんとか難を逃れたな。ラグス中佐達はどうかっている？」

「全員、戦闘中です。シュールスさんは、ア・バオア・クー内部に侵入した模様。続報は入っていません」

「そうか、全員無事だといいたが。それにしても、ホワイトベース隊がいるからかジオンはSフィールドに戦力を集中しているようだな。こちらはずつと優勢だ」

「ええ、もうすぐ後ろの本隊も追いついてくるでしょうから、一気に攻勢に出るんじゃないですかね」

「もうすぐ忙しくな「高速で近づく熱源を検知、真上です！」なんだと！ 対空防御始め！」

船体上部の各所にある機銃が、直上から迫ってくる熱源に向かって掃射を始める。しかし、一向に当たる気配はない。

「正体判明、MA-05ビグロです！ 数は三機」

「艦船では無理だ。ジムに任せるしかない。対空防御は続けるように各艦に通達！」

ビグロ三機は、機体前方の砲門を開きメガ粒子砲を発射した。放たれた三本の筋は射線上のジムを一瞬で蒸発させ、マゼラン級一隻とサラミス級二隻の装甲を貫通しそのまま暗闇へと消えていった。三機はそのまま艦隊の間を下に向かって通過し、しばらく進むと反転してまたこちらに向かってくる。

「マゼラン級一隻、サラミス級二隻撃沈されました。直衛のジムも数機が消滅！ ビグロは反転し、下から向かってきます」

三機は艦隊の最後尾に狙いを定め、高速でサラミス級に接近していく。そして再度放たれたメガ粒子砲は、満足に迎撃も出来ないサラミス級の船体をいともたやすく貫いた。ジムも精一杯ビグロを撃墜しようとしているが、攻撃が当たる気配はない。

「ビグロ三機未だ健在。サラミス級、三隻撃沈されました」

レーダー手が淡々と告げる。アレクはその報告を聞きながら、頭の中で策を模索していた。その時、

「ビグロ、一機反応消失！」

「何が起きた？」

「こちらに高速で近づいてくる信号をキャッチ。これは……サクリス中尉とケン少尉です！」

オペレーターの言葉に「アルビナ」の艦橋では戦闘中にも関わらず歓声が上がったのだった。アレクは椅子に座り直し、皆にバレないよううつつすらと笑顔を浮かべた。

「ケン、見事な射撃だ。このまま他も仕留める。続け！」
「了解」

サクリスの機体は持っていたガーディアン・シールドから手を離し腰に装備されている二つのスプレーガンに持ち変えながら背面のブースターを吹かして、他の艦艇を狙おうと反転してきたビグロに接近する。そして狙いを定めると、連続して引き金を引いた。放たれた複数の光芒は、ビグロの装甲に多数の穴を開けて四散させる。

一方のケンは、もう一機のビグロにロックオンされ接近されつつあった。ジムが持つスプレーガンは先程の射撃でエネルギーが切れ、弾速の遅い肩部のキャノン砲で攻撃するしかなかったからだ。キャノン砲が当たることはないかと判断したケンは、腰にマウントしてあるビームサーベルを手に持ち、向かってくるビグロに自分から接近していく。そしてギリギリのところを下に潜り込み、ビームサーベルを突き立てた。ビグロはそのまましばらく飛行していたがやがて爆発した。

「よし、敵は排除したな。こちらサクリス。これより補給のため「アルビナ」に着艦する」

「同じく補給のため着艦します」

二人は母艦に通信を入れ、開かれた格納庫に機体を着艦させたのだった。